

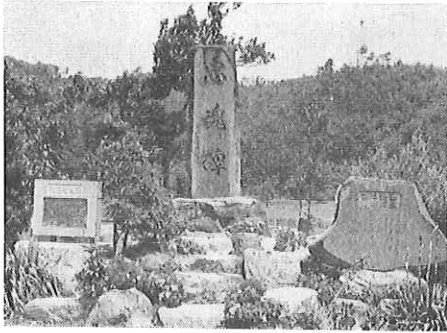
第六章 前線と銃後

第一節 満州事変と日中戦争

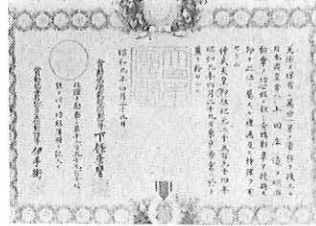
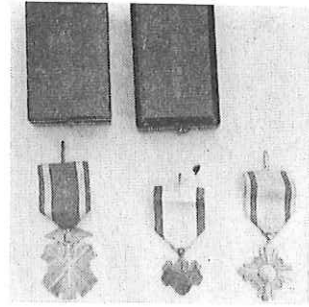
戦時体制 昭和六年（一九三二）九月十八日、柳条溝付近の満州鉄道爆破事件によって満州事変が勃発、翌
への突入 七年一月上海事変、さらに十二年（一九三七）七月七日蘆溝橋事件により日中戦争が始まった。

満州事変勃発と同時に、豊岡町では一八〇余名の兵士が召集されて鳥取・姫路・福知山などの各連隊に入営した。十二年以降は「召集」が相次ぐ。

この「召集」、いわゆる「赤紙」を受取った出征兵士は豊岡駅から送られた。兵士たちの無事を祈って「千人針」を通りかかる女性に依頼する母や妻の姿が日常風景となった。十二年九月になると国民精神総動員運動が提唱され、「挙国一致」「八紘一宇」などのスローガンのもとに消費節約・生活改善・勤労奉仕・貯蓄奨励の掛け声が高くなり、国民服やモンペが男女の「制服」として強制されるようになった。翌年四月には『国家総動員法』が公布され隣組制度が制定された。同年五月にガソリン・重油が割当符制になり、木炭自動車が町内を走り廻るようになる。六月には綿製品が製造販売禁止になり、代用品として「スフ」が登場する。十四年



写219 田鶴野地区の忠魂碑など



写220 勲章と勲記

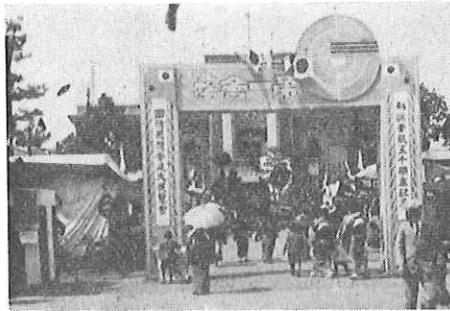
美な服装はつつしみました」と自肅カードを手渡したりした。各家庭に灯火管制準備が下令され、観光地日和山には人影も見られなくなり、十三年春には津居山大成山上に要員八名の防空監視哨が設置された。豊岡でも防空会館楼上で女子青年を含む要員で日々の監視事項を県と舞鶴鎮守府に速報するなど町民の生活も戦時色一色に塗りつぶされた。

学校も例外ではなく、小学校では慰問袋を郷土部隊の兵士に送った。

郷土部隊 満州事変には鳥取歩兵四十連隊・姫路野砲十連隊に出動命令の動向 令が下り、仙台の第二師団とともにハルビン・チチハル・

熱河の各作戦に参加、日中戦争に突入するや姫路第十師団管下の鳥取・姫路・岡山・松江の各連隊が一斉に出征、徐州作戦・漢口作戦に従事した。

二月、金の地金はもちろん指輪・時計・鎖・羽織のヒモの留金に至るまで、金製品はすべて政府が強制的に買上げることになりアイロン・鉄ビン・鉄の本立・郵便受・卓上ベルの鉄製品も製造を禁止された。柳祭はもちろん、盆踊りや鎮守の祭も禁止され、毎月一日は興亜奉公日と定められて、婦人会を含めた監視班が大挙街頭に進出し「パーマネントはやめましょう」「華



写221 昭和15年の国防思想普及大展覽會
(豊岡小学校)

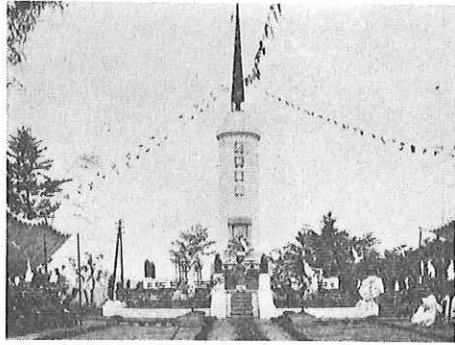


写222 出品物の一つ「爆彈三勇士」
(瀧野久恵氏提供)

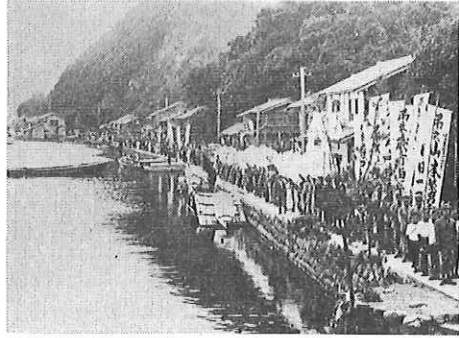
豊岡町出身の兵士のほとんどが入営したこれらの郷土部隊は、「長野部隊」「赤柴部隊」「西大条隊」「沼田部隊」の名で新聞紙上で紹介された。戦争が長びくと、新聞に戦死者の黒枠の顔写真が並ぶようになり、豊岡駅での英霊の出迎えや、小学校校庭での慰霊祭がひんぱんに行なわれるようになり、町内や村々に「誉れの遺族の家」の木札が門口にかかげられた家が目立つようになった。

海軍関係では十四年十二月に舞鶴要港部が鎮守府に昇格し、海軍区令により兵庫県(美方郡と城崎郡)は、京都府・鳥取県・福井県などともに舞鶴第四海軍区に編入され、豊岡の若者の多くは舞鶴・呉の両鎮守府に入隊した。舞鶴鎮守府の戦闘任務は艦艇基地である舞鶴軍港を警備するとともに、担当海面の日本海一帯と、そ

の沿岸を防備することであった。しかし、太平洋戦争末期には、第三特別陸戦隊を編成してキスカ・アッツ両島などアリニューシャン列島への上陸作戦の補給・撤退作戦に活躍した。なかには直轄艦船や民間の輸送船に乘組む者もいたし、重巡洋艦の利根・筑摩や軽巡洋艦・駆逐艦・水雷艇・消防艦などに多くの兵員が補充された。ことに十九年には航空母艦



写223 山王山上に完成した忠霊塔（昭和9年）



写224 戦死者慰霊式場に向かう行列
小島で（昭和13年8月11日）

大鳳が舞鶴を母港としたため、多数の士官・水兵が派遣されたが、六月のマリアナ沖海戦で撃沈されたため、乗組員のほとんどが戦死した。

忠霊塔 戦没者慰霊のため
建立 昭和九年、帝

国在郷軍人会豊岡支部は山王山の南丘陵上に、忠霊塔を建立。

翌年に梨本宮守正王殿下を迎え

た。しかし、二十八年十月、「忠烈無窮」の四文字と銘文が削られ、湯川秀樹博士の筆になる「世界連邦平和都市」碑に代えられた。ちなみに、在郷軍人会豊岡支部は日清戦争後、軍籍に身をおいた者が親睦的に豊岡軍人団を組織し、明治三十六年会員組織の在郷軍人會を作り、四十三年全国組織に組入れられた。在郷軍人會は軍国主義の一翼になったが、日清・日露戦争の戦病死者の慰霊祭・遺家族の援護・出征兵士の見送り・英霊の出迎え・飛行機献納募金などの活動を行なった。

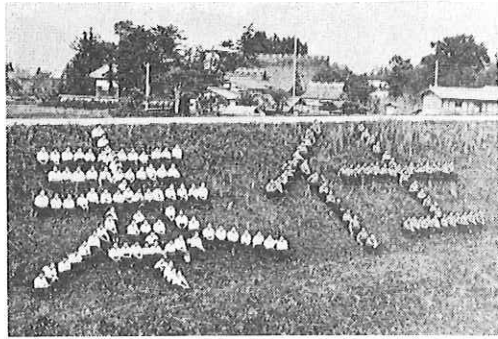
第二節 太平洋戦争

戦時下の昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まった。翌九日には雨の中、各神社で豊岡町民戦勝祈願祭が執行された。

開戦当初の戦果にかかわらず、国内では『生活必需品物資統制令』が公布されて、国民生活は極度に窮屈になった。食糧増産などの勤労奉仕作業が法制化され、豊岡では臣道実践会が発足、第一回訓練として立野焼川敷を開墾した。各学校では全校組織の学校報国隊が結成され、豊岡中学校・豊岡高等女学校も報国隊を結成するとともに、食糧増産勤労隊を編成して奉仕作業に従事した。中学校では軍事教練が強化され、女学校でも運動会を体練会と改め、四年生は射撃基礎練習を行ない妙楽寺の射撃場で実弾射撃を実施した。豊岡小学校は豊岡第一国民学校と改称された。町内の盆踊りは「体操の夕」にかわり、町民三〇〇〇名が参加するなど、町全体が戦時色一色に塗りつぶされた。

十七年になると、衣料切符制が実施され、『食糧管理法』が公布されると農村では米の生産割当と強制供出が行なわれ、軍事用に乾草馬糧・薪炭・松根油・ヒマを供出した。漁村の港地区では、五トン以上の発動機船三五隻中、半数の十六隻が敵前上陸用に徴用されたが、一方では蛋白資源の確保のため漁獲高をあげるようにと指令された。豊岡町や近辺の村々では柳行李と籠、特に軍用弁当行李の製造が割当てられた。

東条内閣は四月、翼賛選挙を断行、部落会・町内会・隣保班を始め各種団体を大政翼賛会の指導下に入れて、



写225 豊岡高女生による勤労奉仕の人文字
清冷寺・出石川堤防。背後は東楽寺



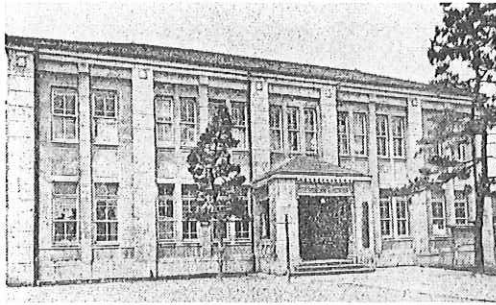
写226 光雲寺(宮井地区)の梵鐘応召
(昭和17年)

政府の推薦候補者を応援させた。但馬五区からは、反軍演説で議会を除名されていた齊藤隆夫が非推薦議員として立候補した。政府は推薦候補者を立てて、その筋の命令で翼賛会・壮年団・在郷軍人会・警防団・隣組などを動員して応援させる一方、齊藤派にたいしては妨害と弾圧を加えた。

しかし、齊藤は一万九〇〇〇余票で二位を七〇〇〇票あまり引き離して当選した。

戦局傾く

戦局は十七年六月のミッドウエー海戦の敗北・八月の第一次ソロモン海戦・十八年二月のガダルカナル島撤退・四月の連合艦隊司令長官山本五十六の戦死・五月のアッツ島守備隊全滅と一挙に傾いた。銅像や寺の釣鐘も弾丸づくりに回収された。寿ロータリー(寿町)の中江種蔵翁銅像も、二十一年ごろ撤去されて、但馬鉄工所に持込まれていた。なかでも食糧の不足は深刻で、間接税など一般の大幅増税が追い打ちをかけて諸物価の値上げによってインフレが進行した。



写227 旧城崎郡役所跡に開設された北但地方事務所
(本町。現市立郷土資料館)

国家財政中、軍事費は八五割に達し、国民経済は破綻した。

北但地方事務所の設置
十七年六月『地方官官制』が改正され、各府県の出先機関として地方事務所が各地に置かれることになり、兵庫県でも七月一日付で北但地方事務所（豊岡町）・朝養地方事務所（和田山町）

など十七の地方事務所が設けられた。

「本機関（地方事務所）は、主として部落町内会の自治的活動の指導・貯蓄奨励・各種国民運動・軍事各般の事務・増産集荷・生活必需品資配給事務・経済統制など、時局下の重要な行政事務を執行するもので……行政事務の敏活確実と施政の滲透徹底を期した次第であります」と成田兵庫県知事が開設時に「県民に協力を要望」した談話の通り、戦争遂行のための県行政の「前線指揮所」であった。

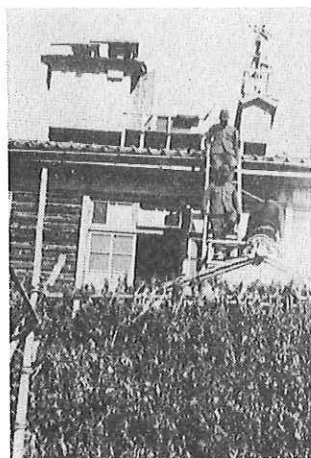
戦局は日を追って悪化し、十九年には徴兵年齢も一歳繰り下げられて十九歳になった。豊岡町も陸軍機・海軍機の二

国家総動員員
機を「豊岡号」と名づけて十八年に献納、小学生も一九一円六八銭の募金を提供した。十九年十月には、いままでの婦人会組織を解消、大日本国防婦人会豊岡支部としてまとめられた。

また男子は昭和十四年の『国家総動員法』にもとづいて、労働者を動員して指定工場で働かせるという徴用制度が発動されていたが、十八年になると企業整備によって廃業に追いこまれた中小商工業者など十六歳から四



写228 豊岡町民が寄贈した報国1410号（豊岡号）
（昭和18年9月20日）



写229 新田小学校に設けられた軍事研究所

して舞鶴海軍工廠や京阪神の工場などへ徴用された。やがて中学生以上の学生生徒の戦時動員体制が確立され、年三〇日間の「臨時かつ分散的」から「常時かつ集中的」な勤労奉仕となった。

敗戦の経過

一方、前線では昭和十九年十月の、太平洋戦争の天王山ともいわれたフィリピンのレイテ島での日米決戦で、わが軍は神風特別攻撃隊を連日出撃させて戦ったが、物量を誇る米軍に圧倒されて惨

敗、太平洋戦線は崩壊した。

フィリピン戦線のバレー峠で、郷土部隊である姫路第十師団は、全滅に近い打撃を受けた。当初、一万三〇〇〇名の第十師団は終戦時にはわずか一〇〇〇〇名になっていた。

十三年四月に編成された姫路第十七師団（月部隊）は、ソロモン諸島に分散派遣され、ブーゲンビル島タロ

○歳までの男子が、徴兵による労働不足を補うため動員された。軍隊への召集が「赤紙召集」といわれたのに対し、これは「白紙召集」と呼ばれ、豊岡町民も数多く工員と

キナ岬の戦闘で全滅した。十五年八月に編成された姫路第五十四師団（兵兵団）^{つわもの}はビルマのアキヤブ・ラムレ島を守備していたが、昭和十九年七月にインパール作戦で日本軍主力がマンダレー街道を敗走するにおよんで、アラカンの山中に孤立、シッタソ河を渡って集結した時、一万二〇〇〇の兵力は半分の六七〇〇に減っており、シャン高原で終戦を迎えた時は三〇〇〇名を割っていた。

十三年に姫路で編成された第百十師団（白鷺兵団）は、十九年春の「大陸打通作戦」に参加、老河口作戦で全滅に近い打撃を受けた。

姫路第二十師団（朝日兵団）は、西ニューギニアのマダンからラエまで三〇〇キロの道路づくりに従事、腹背に敵を受けて終戦を迎えたとき兵力は一〇分の一の二〇〇〇名になっていた。

このほかに但馬の兵士が入隊した部隊には、中国大陸各地を転戦した第三十四師団（樺兵団）・第六十八師団（桜兵団）・第九十六師団（玄兵団）などがある。二十年四月に米軍が沖縄に上陸を開始すると、軍部は本土決戦に備えて国内に新たに四五ヶ師団を新設し、合わせて三〇〇万の大軍を沿岸地域を中心に配備した。これは徴兵適齢者の九〇割に及ぶ大動員によるもので、姫路で編成されたものに第八十四師団・第三百五十五師団・第四十四師団・第二百二十五師団がある。

戦没者 この大戦で戦病死した将兵・一般民間人は二六二万人余となるが、豊岡市の場合は町村合併**の手紙** どの関係で正確な資料が残っておらず、遺族会の名簿などからは二〇〇〇名内外と推定される。

次に、日中戦争及び太平洋戦争で散った郷土の兵士たちの手紙、遺詠などの一部を紹介する。

○島崎英彦（氣比。戦病死。『多摩』同人）

煙草すら戦友に頒ちて剩すなし

今宵死にゆくと額寄せて喫^すう

斯くしつつ果なむ際は思ほへて

今宵書き遺す壕の中より

言かわしさりげなく夜を発ちゆきて

還らぬ命いくつかありぬ

○石田松太郎（豊田。抗州で戦死）

オリオンの光さやけし

果しなき荒野を人馬の黙々とゆく

名も知らぬ村におうなあり

紙の如き白き顔をして我等を迎ふ

○原田邦夫（小田井。老河口で戦死）

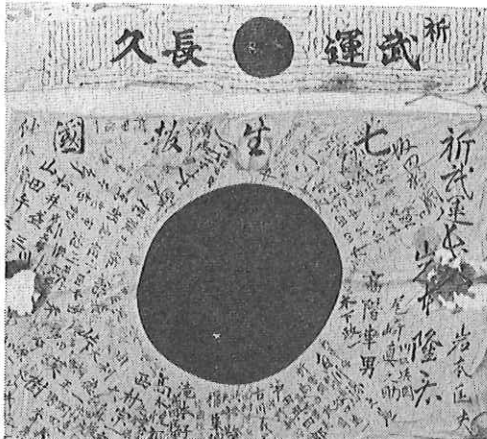
突撃のときぞ来りぬ

敵陣にざわめく色ぞあらわれにけり

待伏せに会いて果てなむ若桜

いまわのきはぞ雄々しかりける

○田中豊治郎（神美村香住。河南省で戦死）



写230 岩本隆氏の遺品、千人針と署名入り日章旗
(岩本敏雄氏提供)



写231 岡田芳雄氏
遺品の奉公袋
(岡田喜世氏提供)

遺書

「御国のために一命をささげる。男子の本懐この上なし。喜んで死す。後の整理は一千余円の貯金等、すべて信夫兄上に依頼し一任す。父上よ、母上よ、かならずとも悲しむなかれ。以上後日のため書き残す」

○佐伯保正（一日市。徐州で戦死）

遺書

「父上様、母上様、二十五年の長い間、お世話様になり、ありがとうございます。厚くお礼申します。保正は心残りなく勇んで奮闘いたします。何も心残りはありません」

○藤原富美夫（法花寺。北ボルネオで戦死）

「六月十二日、便り二通受取る。四月以降の新聞はちょっとみていないのでわからないが凱旋なんてことが書いてあるのかね。たとえ凱旋してもそれは後方勤務者ぐらいで、我らのように第一線に立っている部隊は、とても凱旋なんてできない。まだまだこれからだ。今では目前に漢口、西安の二大目標がある。凱旋はこの事変が終らぬとできないであらうと思っている。いまだに時々召集があつて出るさうだがそうなくてはならん。一戦闘ごとに多少の犠牲は必ず出るんだから、それらの補充のために。（中略）お祖母様、母様によろしく申してくれ。北支戦線にて。兄より。六月十六日」

○赤木氷壯夫（引野。戦病死）

空行かば雲染む屍 君がため

などか惜しまむ若き命を

○山下 豊（城南町。ニューギニアで戦死）

ニューギニアの奥深くきて土人家に

コスモス咲けば故郷しのぼる

○小畑 勲（下宮。マニラ東方で戦死）

再度征く行くは何処の戦場か

唯国を守らん祈りあるのみ

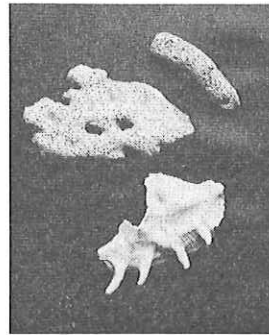
○高 直三（鎌田。ソロモン・ツラギ沖で戦死）

「内地は日増しに寒さの加はることせう。常夏の国といはれる当地では、今が一番住みよい候ださうです。いよいよ私達の活躍すべき時がきました。かねてよりいっていましたがやうに、あるひはこれが最後かも知れません。おおいに頑張つて海鷲の花々しい戦死のさまを、敵の奴等に見せてやるつもりです。

愉快で嬉しくてたまりません。だが母や兄、姉さん、それに茂男のことを思ふと、ちょっと淋しい。めめしと笑はれてもしかたありません。皆様によりしくいって下さい。直三はりっぱに死ぬと。兄上様」

○山本朋弥（京口。南方第六病院で戦死）

「ジャワは最近雨がなく、暑さにはなれましたが、早く降ればと思っています。ジャワっていへば暑い所で、ツツジなんかはないと思はれるかもしれませんが、この間の実習で、山に登りましたとき、美しきツツジを見て、内地を思ひ出しました。また、柿もこの間食べ、じつに天然物に恵れたところといへます。すっかりジャワになれ、内地にいるとなんら変らない気持でご奉公しています。地図で見るとく南方の第一線。覚悟はし



写232 遺骨の代わりに贈られた南洋の貝殻と珊瑚（山下道代氏提供）

ています。内地はこしゃくにも敵が爆撃にきている様子。「戦地では弾丸をあびてる友もある」と歌にありますが「今夜今ごろ、内地では、爆弾をあびてる友もある」と歌ひたいほどです。ますます元氣。一死奉公の念をもって、さらにまい進する覚悟であります。どうかお元氣で。皆さまによろしく。山本亮吉様」

○吉岡喜市（立石。ラバウルで戦死）

「（前略）はや上陸以来八ヶ月になりました。今日内地におればお盆ですね。当地は盆も正月もありません。詳しいことは、内地の新聞に頼みませう。相変らず血生臭い風ばかりです。砲声、爆音とともに明日の戦鬪に備へて休みます。なにとぞ、ご一同様にはお体を大切にお働きあそばされんことを、遠く南の一角よりお祈り申し上げます。八月十五日吉岡亀太郎様」

○有田敬一郎（小尾崎。マニラ東方で戦死）

遺言

「我へ陛下ノ股肱タリ。死ストモ本懐ナリ。父母ノ健在ヲ祈ル。唯一人ノ妹ノ幸福、六人ノ弟ノ健すこやカナル成長、コレ即チ遺言ナリ。弟ノ成長ト御両親ノゴ健康ヲ祈ル。有田千鶴子様」

第七章 教育・文化・社会

第一節 中等教育の普及

進学熱の向上 大正期に入って第一次世界大戦が始まると、県下では神戸市などの大都市を中心に戦争景気による経済の活況と自由主義的風潮を背景として教育熱が向上し、中等学校への進学率が著しく

上昇した。日露戦争を境に志願者数が倍増し、それに伴って定員も増加されたが志願者増に追いつかず、入学競争率はいよいよ激化していった(表150)。

豊岡中学校でも倍率が二倍を超え、大正後期にはさらにきびしくなっており、大幅の定員増をせざるを得なくなっている。入学者の内訳をみると、尋常科卒業でストリートに入学する者が三割内外に過ぎない状況から入学難の感はさらに強かったと思われる。このことは、裏返せば進学熱の向上を物語るもので、入学準備教育が過熱化して、その弊害が問題にされるようになった。

大正期の当地区の児童の進学先は、主として県立豊岡中学校と豊岡高等女学校(大正十一年郡制廃止により県立移管、改称)で、農村子弟の中には、八鹿町の県立蚕業学校(高等科卒を入学資格とする)に入学する者

表150 兵庫県公立中学校入学競争率推移

年 度	中学校数	志願者数	入学者数	倍率
明治34(1901)	8 [※]	1,206 [△]	559 [△]	2.2
41(1908)	9	2,773	1,053	2.6
大正 2 (1913)	9	2,782	966	2.9
7 (1918)	9	3,256	1,105	2.9
12(1923)	13	5,221	2,251	2.3
昭和 3 (1928)	15	4,857	2,700	1.8
8 (1933)	15	5,449	2,714	2.0

『兵庫県統計書』による

表151 県立豊岡中学校入学競争率の状況

年 次	募集人員	志願者数	入学者	倍率	入 学 者 の 内 訳		
					尋常卒	高一修	高卒他
明治43	112	134	119	1.1	28	46	45
44	90	147	87	1.7	37	30	20
45	105	203	105	1.9	30	42	33
大正 2	95	202	98	2.1	39	33	26
3	95	225	101	2.2	45	33	23
4	95	209	96	2.2	40	34	22
5	95	215	98	2.2	28	37	33
6	95	178	95	1.9	30	30	35
7	95	203	96	2.1	33	42	21
8	95	193	98	2.0	46	31	21
9	95	272	102	2.7	51	39	12
10	95	256	100	2.6	47	35	18
11	145	270	148	1.8	65	58	25
12	145	320	143	2.2	83	43	17
13	145	322	141	2.3	83	40	18
14	145	305	148	2.1	81	45	22
15	145	277	142	2.0	95	39	8
昭和 2	145	377	149	2.5	102	38	9
3	195	223	197	1.1	128	58	11
4	195	223	190	1.2	169	15	6
5	195	193	168	1.1	141	24	3
6	200	200	187	1.1	167	15	5
7	200	258	207	1.2	186	17	4

『兵庫県統計書』による

もあつた。例えば八条小学校の大正六年四月の中等学校進学状況は豊岡中学二名（尋卒一・高一修一）、豊岡高女二名（尋卒一・高卒一）、県立蚕業一名（高卒一）の計五名。前年度尋常科卒業は三七名で、高等科に進んだ者は十五名となつてゐる。豊岡小学校の進学状況は大正後期の卒業生の回顧談から察すると、尋常科卒業男子一〇名内外のうち、中学校入学約二五名（高等科から別に約二〇名）・商工実修学校（三年制。準中等学校と考えられていた）へ約十五名・高等科へ約六〇名で、尋常科だけでやめる者は一〇名程度だったとみられる。中等学校進学志向の増加の反面、往年エリートといわれた高等科の地位の低下を物語るものである。

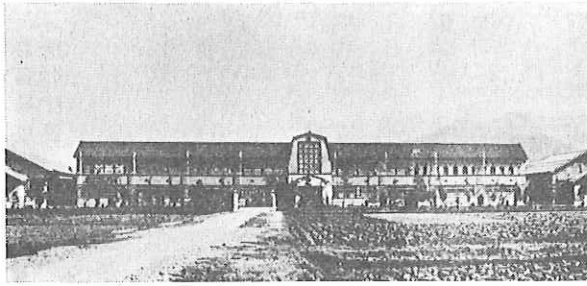
中学校・女学校とも大正期に入ると数年ごとに定員増を行ない、卒業率（入学時の人数に対する卒業時の人数）も上昇している。豊岡中学校の明治二十九年の入学生（第一期生）は一〇四名であつたが、卒業した数は二四名（留級・転入などがあるから必ずしも当初の入学生のみではない）で、二三^名にしかならない。この一期生は二年に進級した者七四名（留級二〇・死亡一・中途退学九）で、三年では六一名・四年で三四名・五年で二七名と減じ、卒業数はさらに減つて二四名となつた。中途退学の理由の大部分は「家事の都合」で、「病氣」がこれに次いでゐる。

卒業率はその後、次第に向上して大正の後期には六〇^{パーセント}になり、末期には八〇^{パーセント}前後となつて中等教育は普及定着した。

豊岡商業学

町立豊岡商工実修学校は昭和二年一月、町役場は新庁舎（現市役所）が落成して移り、校庭の校の発足

西側にあつた仮庁舎が空いたので、そこに移つた。従来、間借りしていた小学校舎と区分された専用校舎をもつことになつたが、これは震災直後に応急に建てられた平家バラックであつたので、かえつて



写233 移転時の豊岡商工実修学校独立校舎

独立校舎建設への期待が強まった。しかし、学校の分離独立は巨額の資金を要することとて遷延されていたが、昭和七年ごろ豊岡耕地整理組合が事業をほぼ完了し、整理によって生じた余地を集約した町北部の常盤字限中の町立グラウンド予定地に校舎が建設されることになった。八年四月二十五日、豊岡町会で、工費四万六〇〇〇余円で新築することが議決された。この建築費のほとんどは、水道の恩人中江種造の嗣子種一と一瀬条吉

(当町出身の銀行家)の厚意と寄付によるもので、幼稚園建築費と合わせて五万五〇〇〇円の内、一万円は中江種一・五〇〇〇円は一瀬条吉の寄付・四万円は中江家の承諾を得て中江奨学基金からあてた。

たまたま、この年十月二日の怪火によって豊岡小学校の校舎の大半が焼失した。このとき実修校の仮校舎は焼け残ったが、この火災が契機となって校舎建設がさらに促進されることとなった。十一月には敷地の整理を終わって建築に着手、翌九年十一月十四日新校舎で落成式を挙行了た。

十年三月三十一日に豊岡商業学校(乙種。修業年限三年)の設立が認可され、校舎は実修学校校舎を充当し、木下政一が校長事務取扱いに補せられ(後に校長)、四月一日に兵庫県豊岡商業学校が発足した。入学者は男子部八八・女子部四五、計一三三名、十二年度には修業年限を五ケ年に延長(男子部)して甲種商業学校に昇格した。これは、上級学校受験資格を与えられることをも目標としたものであった。

教員養成
所の設置

△小学校本科正教員養成所▽第一次世界大戦後は、教育界にとつては受難の時期であった。好況下のインフレに追いついていけない薄給のため、教職を去って経済界方面に職を転ずる者が多く、県下全般に小学校教員が不足し、県当局は師範学校の募集人員を増加するとともに大正九年には、明石女子師範学校内に尋常小学校本科正教員養成講習会（修業期間三ヶ月）を開設して教員短期養成に当たった。

但馬地方は僻地という特殊な事情も加わって、教員不足は深刻で、但馬五郡連合教育会は十一年十二月に知事あて「但馬地方に師範学校を設置する件」を陳情した。

その結果、翌十二年五月一日に尋常科本科正教員養成講習所（男子中等学校卒業・修業三ヶ月）が、県立豊岡中学校に付設された。翌十三年に至って、小学校本科正教員（前年のは略称「尋正」といって、尋常科しか担任できない。これは「小本正」と称して高等科も担任できた）の資格を与えるために期間は一ケ年とし、教科課程も改正、名称も小学校本科正教員養成所と改めた。その後、年々数十名の修了生を送り出したが、昭和初期に入って教員不足も解消され、昭和四年三月末をもって閉鎖された。

△臨時国民学校教員養成所▽昭和初期の不況期には教員志願者が急増したが、日中戦争が拡大して軍需景気が到来すると、またもや教員志願者は激減し、県下師範学校入学志願者数は四年が二九一名（競争率六・四倍）、九年が一六九三名で、十三年にはわずか六七六名となった。現職教員の中からも転職者が続出（県下小学校教員中の退職者は十二年度に四四二名であったが、十五年度には九九五名と倍増した）、その上、応召や学級増などで教員不足が問題化した。

県当局は師範学校の定員の増加や生徒給費の増額で教員志願者を獲得する他、無資格の助教を大量に採用し



写234 開校時の組合立豊岡農業学校（昭和16年）

て急場をしのごこととし（十二年に助教の採用は六一五名だったのが十五年には一一三七名となり、これは教員総数の約一割に当たった）、男女両師範学校内に臨時教員養成所を設置して短期養成にも乗り出したが、男子の応募者は極めて少なく、十七年には神戸第一高女・姫路高女・豊岡高女・柏原高女の四ヶ所にも増設することとなった。

十七年四月一日、豊岡高等女学校に臨時国民学校教員養成所が付設された。「尋正」の資格を与えることを目的とした修業期間六ヶ月の養成機関で、第一回生として五〇名を入所させたが、翌十八年に第二回修了生を送り出すと同時に時局の影響をうけて閉鎖のやむなきに至った。ところが十九年に入ると戦局は急を上げ応召教員も続出し、県下の助教の数は三〇〇名（教員総数の二三割）を超えた。県は従来の方針を変更、国民学校在職中の助教から志願者を募集して再教育を実施することとし、県立豊岡臨時国民学校教員養成所にも但馬五郡内から五〇名の女子の助教を入所させたが、二十年には閉鎖された（『兵庫県教育史』『豊岡六十周年記念誌』）。

豊岡農業学 円山川治水工事の完成（昭和十一年）によって円山川沿岸地帯校の設立 は古来の水禍を免れることとなったが、周辺の町村では農業技術の導入による農業振興対策として、農業学校の設立を要望するようになった。豊岡病院組合（豊岡町他六ヶ村。管理者佐川恒太郎）は、従来からその必要を首唱してきた前管理者伊地智三郎右衛門を顧問に推薦して推進を計った。伊地

智らは、新しい技術を導入して農業後継者を養成するとともに、農業学校の実習を通じて栽培する農作物を原価で病院の入院患者に供給するため、全国でも珍しい病院組合の農業学校設立に奔走した。

十五年十二月二十七日に農業学校設立が認可され、翌十六年三月十五日多田茂校長が着任、二十八日に入学試験が行なわれ、四月十日入学生一〇〇名を迎え、豊岡第二国民学校（旧八条小学校）を仮校舎として開校式を挙げた。

翌十七年、甲種昇格の運動を起こし、十八年度には段階的に第一本科（尋常科卒四ヶ年）と第二本科（高等科卒三ヶ年）を設け、十九年四月一日甲種農業学校に昇格、第一本科は尋常科卒五ヶ年・第二本科は高等科卒三ヶ年としたが、第二本科は二十年度から募集を停止した。

第二節 初等教育の推移

自由主義的 大正デモクラシー思潮の高まりの中で自由・創造・個性・自発性などを強調した自由主義的教育の展開 育が新教育運動として盛んになり、県下では明石女子師範の及川平治が従来の画一的な

教授を批判して動的教育論を唱導した。こうした新教育思想が当地方で実践期に入るのは大正の後期であるが、港東小学校では大正六年度の努力目標に「自発的学習態度の養成」がすでに掲げられている。自由教育思想は、その一環である芸術教育運動に関連して学芸会・展覧会などにその形を表わし、豊岡小学校では大正四年にピアノが備えられ、七、八年ごろの唱歌会には独唱・輪唱・合唱などが行なわれた。十二年からは唱歌劇

が登場、翌年以後は学芸会で児童劇が中心となり、十四年からは表情遊戯（舞踊）も出現し、町民の人気を呼んだ。

この傾向は豊岡小学校だけでなく、港東小学校でも十三年二月の学芸会から劇が登場、こぶとり・万寿姫・花咲爺・桃太郎・椿の首飾りなどの童話劇が演出された。

図画では、色鉛筆による臨画に代わってクレヨンによる自由画が盛んとなり、郡公会堂で世界自由展覧会なども開催された。綴方教育（作文教育）では課題作文から自由選題・生活作文に変わって行ったが、十一年十二月には豊岡小学校長谷垣勝藏の首唱で全但連合文集『日本海』が編集発行された。

自由主義的風潮は体育面では外来スポーツの隆盛となり、画的・命令的な体操よりも生徒の自発活動によるスポーツが評価された。

オリンピック大会や極東選手権大会に、日本選手が出場して活躍するようになったことが刺戟となって、まず陸上競技が小学校にも普及し、十二年五月には豊岡中学校校庭で第一回全但少年競技大会が開催され、豊岡小学校が尋常科の部で優勝した。翌十三年五月の第二回但馬学童競技大会（後に全但少年オリンピック大会と称した時期がある）には、尋常科は豊岡小学校・高等科は港西小学校が優勝した。その後、郡単位や部会単位の競技会も加わり、昭和十年以降は港村学童選手権大会も開催された。

大正十二年八月の城崎郡夏季大学には、わが国自由主義教育の先駆者谷本富とみゆきが招かれ、十五年九月には自由主義教育の本山といわれた「児童の村小学校」校長志垣寛の講演会を豊岡小学校で開催した。大正十五年度の五荘第一小学校の教育方針の一部には、「自力的に自我の拡充をなさしめ、以て自主自律の精神と、工夫創作

表152 市内小学校高等科設置状況(設置順)

校名	設置年月	事項
豊岡	明治20・4	尋常校・簡易校・高等校併置
三宅	明治27・4	出石郡西部の中心校として早い時期に設置
八条	明治36・4	昭和8年豊岡と合併の際廃止。豊岡小高等科へ通学
	(昭和18・4)	再設置。豊岡小より転帰
三江	明治36・4	大正3年廃止
	(大正8・4)	再設置
新田	明治40・4	新田第一校に設置。明治43年廃止
	(大正12・4)	再設置
港東	明治45・4	中絶なく継続
港西	明治45・4	〃
中筋	大正8・4	〃
奈佐	大正9・4	〃
五荘	大正11・4	五荘第一小学校に設置。以後継続
田鶴野	大正12・4	中絶なく継続

の精神を発揚し、自主的国民を養成せんため、自律的学習をなさしめんことを期する」「自由と協同とを原理とすることによって、自発的創造性を有する人格の持主が自覚的に社会生活を営む素地をつくらんことを期する」とあり、同年度の港東小学校の教授要綱には「学習動機を誘発し、且つ之を補導して児童の天賦の能力を伸展せしめ、抽象的画一的の教授をしりぞけ、児童の個性を尊重し、個別指導を行ない、自発的学習を好む習慣を涵養すること」ともある。しかし、自由主義教育といっても、国家主義のわくの中での方法的操作の域を出なかったといつてよい。そこに大正デモクラシーの限界があった。

高等科増設 と幼稚園

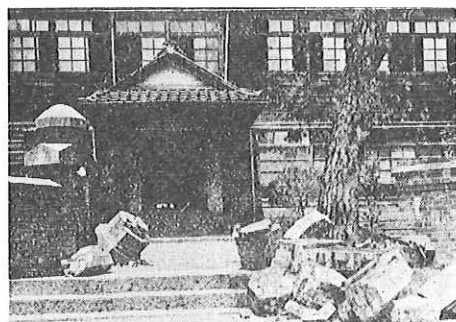
大正期は自由主義的風潮と経済的繁栄の影響で、義務教育期間(尋常科)を中心に、その上下にも教育要求の高揚した時期であった。中等学校進学熱の向上にともない、かつてエリート校といわれた高等科がほとんどの小学校に併置されて普遍化するとともに(表152)、就学前の幼児教育への要望も高ま

表153 市内各幼稚園沿革概要

園名	年月	事項
めぐみ幼稚園	明治31・3 大正13・4 昭和3・12 29・4	私立豊岡幼稚園として設立(前年、婦人会事業として開設) 豊岡第一幼稚園と改称 専任園長制となる(西垣みつ子) 豊岡めぐみ幼稚園と改称
ひかり幼稚園	大正13・4 14・4 昭和29・4 46・4	入園希望者激増のため、光行寺境内の一角に設立 専任園長制となる(木下みつ) 豊岡ひかり幼稚園と改称 旧北中学校運動場跡(幸町)に移転
八条幼稚園	大正11・2 昭和6・12	土曜幼稚園(第1回)開設(主に3学期に入学前児を集めて実施) 八条幼稚園創立(11月21日設立認可、12月6日開園式)
三江幼稚園	大正12・5 昭和7・5 22・5	幼稚園開設(週2日・8ヵ月間)幼児54名・保姆1名 私立幼稚園として保育開始(断続的に実施) 豊岡町立三江幼稚園として設立認可、開園
田鶴野幼稚園	大正15・8 昭和22・4	村立保育園として開設(以後断続的に実施) 豊岡町立田鶴野幼稚園設立
五荘幼稚園	大正13・5 昭和18・11 22・4 25・4 25・9 46・4 47・4	五荘第一校下に幼稚園開設 村立五荘第一幼稚園設立認可、開園 村立五荘東幼稚園と改称 五荘西校下に幼稚園開設(五荘村解体合併、豊岡市制実施) 豊岡市立五荘西幼稚園認可、開園 豊岡市立五荘東幼稚園として独立 五荘東・西両幼稚園を統合して五荘幼稚園とする
新田幼稚園	昭和8・6 25・5 25・8	農繁託児所開設(85名収容)以後18年まで毎年1週間程度開設 新田幼稚園開設(同年4月新田村解体合併、豊岡市制実施) 豊岡市立新田幼稚園認可、開園
中筋幼稚園	(昭和初期) 昭和25・4 25・8	裁縫科教員の兼務により幼児保育実施(不定期断続的) 中筋幼稚園開設(同年4月中筋村解体合併・豊岡市制実施) 豊岡市立中筋幼稚園認可、開園
奈佐幼稚園	(昭和初期) 昭和32・4	裁縫科教員の兼務により幼児保育実施 豊岡市立奈佐幼稚園認可、開園(昭和30年合併)
三宅幼稚園	大正13・11 14・2 昭和32・9	三宅幼稚園開園(11月10日開園式・無認可) 神美村立三宅幼稚園設立認可(4月1日正式開園) 豊岡市立三宅幼稚園と改称(豊岡市へ分村合併)
港東幼稚園	(大正11年) 昭和4・5 16・6 30・4	土曜幼稚園開設(幼児61名、保育日数22日)以後、年々開設 港村立港東幼稚園認可・創立(昭和9年11月廃止) 再び設置(認可) 豊岡市立港東幼稚園と改称(豊岡市へ合併)
港西幼稚園	大正12・11 昭和4・5 16・6 30・4	土曜幼稚園開設(翌13年度より平日午后の保育に改める) 港村立港西幼稚園認可・創立(その後廃止となる、昭和9年か) 再設置認可 豊岡市立港西幼稚園と改称(豊岡市へ合併)



写235 震災で倒壊した港西小学校校舎



写236 震災で正門が崩れた豊岡小学校本館
(大正14年5月24日)

域の学校に対し、物的・精神的に大きな影響を与えた。

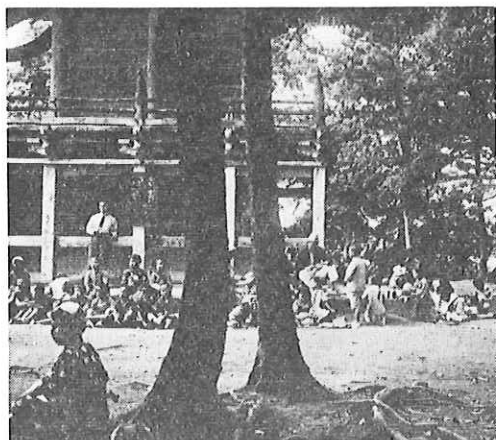
港西小学校では、屋内にいた数名の児童が倒壊校舎の下敷となって死者六名・負傷者三名を出した。校舎は本館中央部・雨天体操場が倒壊した。校庭に大亀裂が生じ、所々に噴水したが、「御真影」は安泰であった。翌日「行方不明の三年男子二人の死体、控所より出る。死者計六名」とある。

豊岡小学校では児童六名が帰宅の途上死亡、他に実修校生一名が家庭で圧死した。校舎は東・西両控所が倒壊寸前の状態で、一教室は天井が墜落、付属建物及び煉瓦高塀の一部が倒壊した。児童は保護者に直接手渡し、高等科生徒は実修校生とともに学校付近の倒壊家屋に人命救助の手助けに行く。

つて、たいていの地域に幼稚園ないし幼稚会が開設された。幼稚園は一般に大正期に非公認の幼児教育施設として発足、昭和期に入ってから（多くは豊岡町との合併を機に）正式な幼稚園に切り代えられている（表153）。

震災の被害

大正十四年五月二十三日午前十一時過ぎに起きた北但大地震は、当地



写237 震災後の野外授業（山王山で）



写238 救護隊本部が置かれた県立豊岡中学校

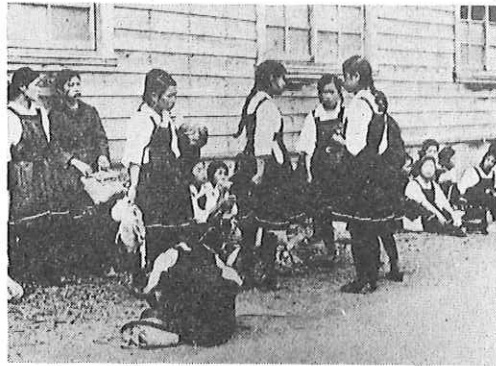
校庭は臨時救護所兼避難場にあてられ、「御真影」は谷垣校長が豊岡中学校に奉遷した。救護班も中学校に移され、当校は救護隊本部となり、徹宵混雑を極めた。六月一日から各地に分散して野外授業を行ない、十五日から校舎内授業を復活（半日授業）、六月二十二日からようやく平常に近い状態に復した。

また校舎全壊の港西小学校では一ヶ月近く分散授業の後、六月下旬バラック校舎ができた。

港東小学校では校舎の倒壊はまぬがれたが、震源に近いだけに甚だしく傾斜し、二階は危険で使用に堪えない状態となった。死傷者はなかったが、六月一日から神社境内に天幕を張って授業を開始した。七月に入って

校舎の応急修理ができたので、舎内授業を再開、後に改築した。

田鶴野小学校は校舎本館中央部が大傾斜して柱のほとんどが折れ、その他の箇所も大破して使用に堪えず、バラック校舎を建てて授業を再



写239 修学旅行から帰って北但大震災を知り
呆然とする豊岡高女生

開、後に改築した。

新田第一小学校・同第二小学校とも倒壊はまぬかれたが、大傾斜を来たし、使用に堪えない状態となった。後に統合新校舎を建築した。

その他の小学校（五莊第一・第二小学校、三江小学校、八条小学校など）は小破損程度である。

豊岡中学校の校舎の破損は教室の壁の剝落・寄宿舎や食堂小傾斜の程度に止まったが、病気欠席中の生徒一名が死亡した。罹災生徒（家屋倒潰及び焼失）は二一九名で、全校生の三六〇名に及んだ。五月末まで休業したが、その間職員・生徒らは警備救援などに献身的に活動して、各方面から感謝された。校舎・校庭を開放して罹災者の避難所・救護班の本部・傷病者の収容所などに充てた。

豊岡高等女学校の校舎は比較的地盤が固かったから軽微な破損に止まり、死傷者もなかったが、生徒の罹災者は、全焼七一・全潰二六・半潰五三、計一五〇名で、全生徒の三七〇名に及んだ。

五月二十三日は全学年修学旅行中（四年生は東京方面・三年生は出石方面・二年生は鳥取・一年生は香住）であったが、残留登校中の生徒を運動場に避難させ、理科薬品を防災処置した。修学旅行隊の安否が気づかわれたが電話不通、夜に入って香住方面は無事であることが分かった。二十四日に修学旅行隊が無事帰着、焦土



写240 模擬戦闘訓練 (昭和初期・県立豊岡中学校)

と化した郷土に恐愕し、不安の思いで帰宅した。六月一日から授業を再開した。

国家主義の復 活と郷土教育

前述のように自由主義教育が普及展開していく一方で、保守的伝統主義の立場から、欧米流の新教育に対する根強い批判もあった。そうした声の高まりを背景として、大正六年九月政府は総理大臣の諮問機関として臨時教育会議を設置して大正デモクラシー思想の影響による国民思想の動揺をおさえ、明治以来の国家主義体制を再編成しようとした。この教育会議は従来 of 注入主義・画一主義を退けて自発的個性主義を推進しようとする進歩的見解も示したが、反面「護国の精神に富める忠良なる臣民を育成する」という国家主義思想が根本になっていた。

その一つの現れとして、九年には従来 of 『小学日本歴史』が『尋常小学国史』と改称され、次いで十二年十一月には『国民精神作典』に關する詔書』が下付されるに及んで教育統制が強まり、それにつれて教育現場からもこれに呼応し迎合する主張が次第に現われ始めた。

続いて十三年には『軍事教育実施要綱』が制定され、自由主義勢力の強い反対をおさえて翌十四年四月、『陸軍現役将校学校配属令』が公布されて、中等学校以上に配属将校による本格的な軍事教育が実施されることとなった。第一次大戦後の軍備縮少による国防力の低下を補い、潜在的軍備の強化を図るのと、余剰将校の再就職確保が目的であった。豊岡中学校には鳥取連隊所屬 of 徳田大尉が配属された。



写241 豊岡小学校の二宮尊徳像
昭和5年、教育勅語発布40
周年記念に建立された

大正末期から昭和初期にかけて経済不況期という情勢下で政府は、地方の指導的役割を担っている小学校教師に郷土への関心を持たせて、農村の思想善導・自力更生運動推進の一助としようとした。この事は先に画一的教育に反対して個性化・自由化を図ろうとした新教育の洗礼を受けてきた教育界に、教育の地方化即ち郷土化という形で進んで受け入れられることになった。これが昭和初期の郷土教育振興の主な理由である。

昭和六年、豊岡小学校は郷土室を設け、『郷土読本』を発行、この年に三宅小学校でも郷土研究室を設けた。田鶴野小学校では昭和九年に『郷土誌資料集』や『郷土読本』を作製した。

このころから、二宮尊徳像が各校に相次いで建立されたが（昭和五年豊岡校、六年八条校、八年港東校・港西校、十三年中筋校・三江校・新田校など）、これは勤儉力行・自力更生・地方復興を合言葉としたこのころの世相と教育の象徴といえる。

豊岡中学校では、指導的立場から『但馬読本』（昭和十三年発行）を編集発行した。

郷土教育こそ教育の出発点であると同時に到達点でもあるとてはやされた郷土教育は昭和八、九年を頂点として、進み行く国家主義の流れの中で、祖国愛の根源としての郷土観念を養成する郷土教育へと転換していった。そして、戦争の拡大とともに愛国心に拡張された皇国主義に統一されていくのである。

皇道教育と

明治中期から後期にかけて確立した皇国主義思想は大正期の自由主義思想と併行して太い流れを作ってきたが、昭和三年の御大典（即位の大礼）や六年の満州事変を経て、学校教育の上に

軍国主義

姿をあらわにしてきた。その象徴が御真影・奉安殿と楠木正成（大楠公）像である。

御大典を契機に各学校は競うように室内の奉安庫に代えて神明造りの「御真影」奉安殿を建立した（昭和三年港西校・港東校・三宅校、四年新田校・三江校、七年田鶴野校、八年五荘校、九年豊岡校、十年中筋校、十二年八条校。なお豊岡中学校と豊岡商業学校は昭和十六年）。奉安殿の建設は公費によったものではなく、篤志家の寄付もしくは職員生徒の醸金によるものであった。昭和初期の皇室関係の学校行事（四大節以外）を挙げると、三年十月十日の御真影奉戴式・十一月十日即位大礼奉祝式・四年六月七日の天皇神戸行幸奉迎式・十月二日伊勢神宮式年遷宮祭遙拝式・五年十月三十日教育勅語下賜四〇周年記念式などがある。

六年九月十八日に満州事変が勃発、郷土部隊の鳥取第四十連隊が満州に派遣されることとなり、同年十二月初旬最初の出征軍人をのせた特別列車が通過した。港西校は城崎駅、豊岡校は豊岡駅でこれを見送った。翌七年一月二十八日には上海事変が起きたが、二月初めには郷土部隊で最初の戦死者遺骨が原隊に帰還するのを各学校在豊岡駅で出迎えている。五月には戦車の運転実演が駅通りで行なわれ、また町役場と豊岡小学校講堂で国防展が開催されて、近隣の児童生徒も見学している。戦火の拡大につれて在郷軍人の召集が始まり、応召兵の見送りや武運長久祈願などが学校行事に組みこまれ、港村では八月十日始めての戦死者村葬が行なわれた。翌八年三月にはわが国は満州（中国東北地方）の処理をめぐる国際連盟を脱退したが、学校も次第に軍国色を濃くした。九年は建武中興六〇〇年に当たり、皇国思想高揚の年で、三月には建武中興六〇〇年記念祭が挙

行され、記念事業として豊岡町では山王山に梨本宮守正王染筆になる忠霊塔が建設され、豊岡小学校では大楠公像が建立された（十三年には港西校・十四年には港東校・十六年には八条校も）。この年四月三日、全国小学校教員精神作興大会が皇居前広場で挙行されて天皇の親閲があり、参加代表の帰郷をまつて四月二十七日に日高町日高小学校で但馬五郡教員精神作興大会が開催された。十年五月には梨本宮が忠霊塔参拝のため、翌十一年九月には姫路騎兵第十連隊長賀陽宮恒憲王が防空演習視察のため来町した。

中等学校では軍国化がさらに進み、豊岡中学校では大正十四年の現役将校配属以来教練が重視され、毎年の査閲以外に四、五年生の鳥取連隊営内宿泊（軍事の体験教育）が実施され、十五年には八鹿蚕業学校との対抗演習、昭和二年には鳥取連隊現役兵との対抗演習が行なわれている。昭和三年以降は、陸海軍の高級将校による軍事講話が重ねられ、四年には八日市陸軍飛行場・大阪砲兵工廠、八年には舞鶴海軍要港など軍事施設の見学が実施された。また、四年六月と七年十一月には大阪城練兵場に於ける天皇の親閲式に代表生徒が参加した。

第三節 補習教育と社会教育

青年夜学会 勤労青少年を対象とする実業補習教育の必要を最初に主張したのは、明治十八年（一八八五）と教育召集 ドイツ留学から帰国した豊岡出身の浜尾新（当時、文部大書記）である。その後、商工業の発

達にとりもなう産業界の要望で二十六年に『実業補習学校規程』が出た。この学校の目的は、補習教育と実業教育の二面がある。明治の中ごろは就学率が低く、日清戦争から日露戦争を経過する中で、壮丁（徴兵検査を受

ける男子)の学力不足が問題となつて、補習教育の必要性が強く叫ばれるようになった。農村地域では青少年の風儀善導の趣旨を加えて、補習学校への前段階として卒業生の教育召集や青年夜学会という形で補習教育が実施された。八条小学校では三十三年に卒業生のために補習科を設置したが翌年には廃止され、田鶴野村では三十五年ごろ青年会事業として夜学会と女子短期補習教育を行なつた。

郡では、県の意向を受けて三十七年ごろから夜学会開催の督励に力を入れ、八条村では三十九年四月に尋常科卒業生を召集して補習教育を開始、午後二時半から三時間ずつ一〇日間にわたつて行なわれ、科目は修身・国語・算術の三科目であつた。この年六月の学務委員会では夜学会の開設をきめているが、なぜか実施に至らず、十月には二回目の教育召集を行ない、受講者には温習証書を授与した。

三十九年四月の調査による郡内の青年夜学会実施状況は、八条村(三六名)・新田村(一四八名)・奈佐村(十二名)・港村(九四名)・中筋村(二〇名)である。

豊岡町は同年十一月、約半月間の夜間教育召集を始めた。八条村は四十年度には、五月と十月の二回教育召集を行なうとともに、別に夜間壮丁教育を実施し、十二月の学務委員会で再び『夜学会創起の件』を協議したが、今回も実施に至らず、一年後の四十二年二月よりやく夜学会を開設した。

以後、週三回程度開校し、四月末に閉会している。『兵庫教育』(明治四十二年二月号及び十月号)に、徴兵検査の際の壮丁学力調査結果についての調査委員の見解が示されているが、それによれば成績の良否は夜学会の盛否によるとしている。

港東地区は、大正初期に補習教育を熱心を実施していた。港東小学校校区では学校の指導のもとに港村青年

表154 港村東部青年夜学会の状況

年度	項目	氣比	田結	畑上	三原	計
大正3	該当者数	33人	17	12	5	67
	参加数	30人	17	12	3	62
	就学率	90.9%	100	100	60.0	92.6
	出席歩合	82.8%	92.1	83.5	(中絶)	
4	該当者数	29	15	11	6	61
	参加数	27	15	10	6	58
	就学率	93.1	100	90.9	100	95.1
	出席歩合	58.7	84.2	88.7	86.2	75.6
5	該当者数	25	10	15	6	56
	参加数	24	10	15	6	55
	就学率	96.0	100	100	100	98.2
	出席歩合	84.2	68.0	85.3	91.7	81.6
7	該当者数	21	8	13	4	46
	参加数	18	8	13	4	43
	就学率	85.7	100	100	100	93.5
	出席歩合	58.7	99.9	95.2	93.3	80.6
8	該当者数	14	—	13	—	27
	参加数	11	実施せず	13	実施せず	24
	就学率	78.6		100		88.9
	出席歩合	82.6		96.6		91.0

- 注 1. 該当者は、小学校卒業から壮丁年齢(20歳)までの在郷者
 2. 大正6年度は資料欠落。大正9年度から実業補習学校設置
 『港東小学校沿革誌』より

会東部会の事業として、大正三年冬の農閑期を利用して部落単位で青年夜学会(男子)を開設した。講師は小学校の各集落担当がこれに当たり、以後は年々開設した(表154)。

大正七年度には港村の補助金五〇円を受けたとあるが、三年十二月から三ヶ月間は男子の夜学と併行して女子補習教育を実施した。

当時、地区の女子で義務教育を終えた者は貧富の別なく二、三ヶ月間子守に雇われ、その後は京阪

地方に「汐踏み」と称して出稼し、婚約が調うと帰郷、二、三ヶ月間裁縫を習い婚家に入った。「故に技能拙劣にして、止むなく仕事着以外の衣服は他人の手に依らざるべからざるの状態で、一家の主婦たる資格なく、実に慙然なる境遇なり」(『港東小学校沿革史』)という状況であった。入学者は二〇名で、年齢十四歳以上二〇歳まで、午前九時始業で午後四時終業、十二月一日から二月二十八日に至る三ヶ月間にわたった。学科配当は

表155 市域内青年夜学会状況 (大正5年10月)

町村名	青年 団体数	会員数	夜学設 置団体	夜学 会員数
豊岡町	10	562	1	35
八条村	7	124	3	48
新田村	10	166	10	166
三江村	1	200	1	15
田鶴野村	5	80	4	60
五荘村	3	185	3	10
奈佐村	1	100	1	70
港村	7	306	7	161
中筋村	9	157	7	84

『城崎郡役所事績録』より

毎週、裁縫(二二時)・作法(二時)・修身(二時)・読方(四時)・珠算(二時)・綴方・書方(各一時)であった。

青年会

夜学会の振興にあずかって力があつたのは、明治後期から大正前期に組織化されて活発な活動を行なっていた青年会(青年団)と同窓会である。

特に集落単位に発足した青年会は、県の指導で次第に町村単位に統合され、大正期に入るとさらに統制が強化され、四年九月には政府は青年団改善の訓令を出して設置基準(団員は義務教育修了から二〇歳までとし、

小学校単位で設置)を示し、小学校長と町村長を指導者として指示された。従来親睦団体・修養団体としての青年会が、政府の指導統制のもとに壮丁教育機関としての意味が強められたのである。

三、四年ごろ中筋村では青年会(会長は村長)の事業として、また三江村では同窓会(会長は校長)の事業として夜学会を開設している。八条村では四年一月から青年夜学会と併行して、女子召集教育(昼間制)が実施された(表155)。

行政指導が強化される中で、普通教育補習に偏した青年夜学会に対する検討が行なわれ、青年団の手を借りて夜学会を実業補習学校へ発展させていくことになった。八条村では六年十一月に『実業補習学校設置案』を郡役所に提出したが実現に至らず、その設置は十二年に持



写242 田鶴野村青年団赤石支部旗

ち越された。

実業補習学校 七年度早々に実業補習学校を開設したのは、豊岡町（豊岡商業補習学校）と新田村（新田第一実業補習学校）として発足。九年四月

農業補習学校と改称）で、遅れて十一月に三江村（三江実業補習学校）が開設した。

次いで大正八年十一月、県は実業補習学校の統一的指導を徹底させるため『実業補習学校設置基準並に同奨励規程』を定めた。港村では港東・港西両地区とも九年に従来の青年夜学会を切り替える形で実業補習学校をそれぞれの小学校に併

設した。

五荘村では九年十二月から翌十年三月末まで、毎週月水金の三回、二〇歳以下の青年に対し夜学会を開設したところ好成績だったので、補習学校開設に踏みきることとなった。十年四月九日付で認可されたので五荘第一農業補習学校を第一小学校に、五荘第二農業補習学校を第二小学校に併設し、翌十一年には両校とも女子部を開設した。

田鶴野村では十一年十一月二日に田鶴野農業補習学校を開設、八条村では翌十二年二月二十日に設立認可を得て実業補習学校として開設、次いで同年九月十一日には中筋村に農業補習学校を開設した。奈佐村では八年に夜学会を開き、十四年に奈佐村立農業補習学校とした。

神美村では遅れて十五年七月、青年訓練所設置と同時に三宅農業公民学校を開設し、翌昭和二年一月女子部を設けている。

これら農業補習学校は当初は尋常科卒業生を対象に修業年限三ヶ年以内とされていたが、改正されて前期（尋常科卒）二年・後期（高等科卒及び前期終了者）三年・研究科三年となった。科目は修身・国語・数学の普通科目の他、農業と法制経済（女子は家事裁縫）などであった。

八条実業補習学校の場合、主要施設・事業として教科書貸与・学校実習園・珠算競技会・裁縫競技会・家庭実習田・一人一研究・生花及び茶道講座・作法実習日・雑誌回覧などが挙げられる。同校は昭和八年四月一日町村合併により豊岡町立八条実業補習学校と改められ、専任教員一名を置くようになった。

青年訓練 第一次世界大戦後の軍縮により国防力の低下を恐れた軍部は中等学校以上に軍事教練を課す**所の併置**とともに、一般の勤労青少年にも国防的訓練をほどこすことを計画したが、在来の実業補習学校ではこの目的を達成することができないとみて、文部・内務両省の協力のもとに生み出されたのが青年訓練所である。

大正十五年四月に『青年訓練所令』が公布され、青年訓練所は補習学校の上位に置かれ、両者を併置する形で同年七月に県下ほぼ同時に開設された。訓練所令では、その目的を国民としての一般教育を施すこととしているが、教育内容をみると公民科・普通科・職業科を合わせた時間数と教練科の時間数が同じであること、訓練所終了者には兵役を六ヶ月間短縮する特典が与えられることなどから、壮丁予備教育といつてよいものであった。なお入所年齢は十六歳（補習学校後期三年にあたる）で、二〇歳までの四ヶ年を訓練期間とした。

当地域では、当時の町村単位（港村は二ヶ所）で大正十五年七月中に補習学校に併設された。五荘村の初年度の生徒数は三三名で、就学割合は七五割、昭和二年度の在籍生徒数は四一名、昭和三年度は四七名であつ

た。

以後、ほとんどの小学校では、補習学校と青年訓練所の三つが同居することになり、補習学校校長と訓練所主事は小学校長の兼任で、教員も教練科を除いてほとんど小学校教員が兼務した。教練の指導員には在郷軍人を委嘱した。

豊岡町立青年訓練所は大正十五年七月一日に豊岡商工実修学校校舎内に併置され、設立当初から数名の専任指導員を置いて充実した運営を行なっている。授業日は通年制で、毎月第一・第三日曜の午後と、毎月二十五日までの火・金曜の夜間とし、年間規定二〇〇時間に対し、二四〇時間を見込んだ。

神美村では昭和三年二月、中筋村では同年六月に補習学校（公民学校）と訓練所を一本化して、「青訓充当農業公民学校」とした。

豊岡商工実修学校 大正七年始め、豊岡小学校長平井慶次は、豊岡町の実業教育振興を計るため、まず商業補習学校を創設し、後に乙種商業学校（尋常卒業後三ヶ年制）に昇格させていく案を町長佐川恒太郎

と計り修業年限二ヶ年の町立商業補習学校を豊岡小学校に付設する件を三月二十九日付で県の認可を得た。一般の補習学校と違って通年昼間制（全日制）で、小学校高等科と併立する形で設置された。

四月四日、第一期生三九名の入学式が豊岡小学校講堂で挙行されたが、後に六人が途中編入された。教科は修身・国語・算術（珠算を含む）・地理・理科・商業・英語・体操で、教室は本館二階を専用したが、専門の教員を得ることが難しく、とりあえず小学校教員を兼務させたり、県立豊岡中学校教諭数人を講師に委嘱して出発した。それまで別に小学校内に設置していた夜学部を商業補習学校に付属させるとともに女子部を設け、

この年の夜学部には男子二六名・女子二五名が入学した。十年度から修業年限を三ヶ年に延長、乙種商業学校昇格への体制を作った。

十一年度には入学希望者が著しく増加したため昼間部に一学級増設、この年始めて女子二名が入学、翌十二年には女子一〇名、十三年には三〇名を数えるに至った。

そこで、十三年度には工業部（家具科）と女子部（技艺科）を増設して、校名を豊岡商工実修学校と改め、今日の県立豊岡実業高等学校に至る一步を踏み出した（本章第一節参照）。

青年学校 勤労青少年に対する補習教育機関としてはまず実業補習学校があり、その卒業生を入所させるの発足 という構想で青年訓練所が設けられたのであるが、実際は補習学校の最終学年と訓練所の第一

学年が同じ十六歳で重複していた。その上、補習学校は十七歳以上の者を研究科または専修科として収容させようとし、訓練所は高等科を卒業した十四歳から入所させようとした。

同じ小学校内に併置された農村地域では、重複による不都合は調整しやすかったが反面、三種の学校が小学校舎に同居して、小学校の校長や教員が主事や指導員を兼務したり、また授業時間の調整など複雑な問題を生じていた。そこで、市町村側の要望によって昭和十年四月一日に『青年学校令』が公布され、従来の補習学校と青年訓練所を発展的に統合して青年学校が設置されることになった。

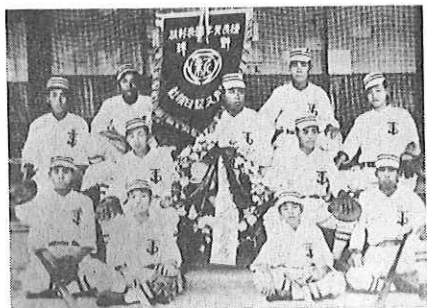
現市内の各地域では、それぞれに設立申請を行ない、小学校長が青年学校長を兼任して八月一日に一斉に開設している。しかし、豊岡町は新年度の四月一日に豊岡町立青年学校として入学式を行なった。

青年学校の編成は、男子部は普通科（尋常科卒）二年・本科（高等科及び普通科卒）五年・研究科二年で、

女子部は普通科二年・本科三年・研究科二年とした。青年学校の目的は格別に軍事的目的を強調してはいないが、男子部の教練の時数が青年訓練所の時より増加していることからみても、その主意をうかがうことができる。県は『青年学校令施行規則』を定めて具体的内容を示したが、従来の補習学校や訓練所が一年のうちで自由に授業時間を定め、大てい季節夜間制をとったのに対し、毎日昼間に授業と訓練を行なうこと（通年昼間制）を原則とした。施行規則の教授及び訓練の時数は、普通科では二年間に五〇〇時間、教練は課さず普通教育補習が主体であった。本科男子は五年間で一一一〇時間、内訳は修身公民一二五時間・普通学科と職業科五八五時間・教練四〇〇時間で、女子は普通科二年間で五〇〇時間・本科三年間で七二〇時間、どちらも職業科及び家事・裁縫などの実用的な科目が主体となっていた。県下では軍官民を挙げて青年学校への入学を強力に勧奨した結果、補習学校・訓練所時代の就学数をかなり上まわったが、それでも対象青少年の半数程度を捉えたに過ぎなかった。

十四年四月には青年学校令の任意就学制を改正して、十二歳から十九歳までの男子を義務就学させることとした。この義務制は全学年一斉ではなく、十四年度普通科男子第一学年から逐年実施し、二十年度で本科五年の義務制を完了する予定であった。こうして青年層の約八割を占めていた勤労大衆に対し、小学校卒業後さらに七年間（高等科卒業後五年間）、青年学校での義務教育を受けさせることとしたもので、教育制度上画期的なものであった。

教員養成は、従来県立農学校（加古川町）内に設けられていた農業補習学校教員養成所を十年に県立青年学校教員養成所（修業年限二年）と改め、十四年の義務教育制実施とともにさらに充実を図った。



写243 野球大会優勝の豊岡青年団
大正末年ごろ（佐伯雄一氏提供）

青年団の発足と活動
 青年団については、明治中期ごろまでは旧来の「若連中」が継続されて、村々の自治活動にそれなりの役割を荷なってきたが、一面風儀上その他の弊風も見出し難いものがあつた。そこで日露戦争前後からその改造と近代化の論議が盛んとなり、明治三十九年一月に郡長は町村長・小学校長に対し旧来の若連中などの弊風を排除して有益な活動をさせるように啓発指導すべき通牒を發し、新しい青年団体の設立を奨励した。ほとんどが旧村部単位の組織であるが、江野村では明治四十年一月に同進会（『五荘村史』）、神美村では三十八年十月に穴見谷と小野谷の両谷に青年会（『神美村誌』）、田鶴野村では四十一年九月各集落ごとに（『田鶴野小学校郷土資料』）、組織された。また、奈佐村でも明治末期に各集落ごとに青年会が設けられた（『奈佐誌』）。明治四十三年一月の城崎郡青年会の状況は、町村単位の団体十一（新田・田鶴野・五荘、他）・連合制のもの三・集落単位のもの三九・学校通学区域単位のもので、着々統一の機運に向かいつつあつたという（『城崎郡役所事績録』）。そして、大正に入つて当局の指導統制が強化され、組織活動も活発化して青年団最盛期を迎える。大正四年九月には内務・文部両大臣の名で青年団に関する訓令が發せられ、五年九月には団の組織・運営と町村青年団規程の準則を示した。大正七年には、城崎郡青年団が創立された。

豊岡町青年会は大正四年三月設立、会長は名望家の由利三左衛門・副会長は小学校長平井慶次・各区に正副支部会長を置き、年齢の制限がなかつ

表156 城崎郡内青年会調査(明治40年7月)

町村名	団体数	会員数	備考
豊岡町	1	95	仏教青年会と称する
新田村	10	271	
三江村	1	82	江野村 氣比村
五莊村	1	40	
港村	1	63	
「以上の外、中筋村、八条村の一部にも青年会と改称の議あるも、未だ報告すべき材料なし」			

『城崎郡役所事績録』による(現市域分のみ)

たので、会員数は三〇〇名以上に達した(後に郡青年団の規程に依じて満三〇歳以下とする)。大正十一年度から豊岡町青年団と呼称するようになり、十五年から従来の制度を改めて青年の自主的修養団体とし、団長以下役員は会員の互選により任期も一年と二年とした。大正末期から昭和初期にかけての豊岡町青年団の最も顕著な事業としては、出征軍人・傷病兵・遺家族の慰問・慰安などが主に挙げられる(『豊岡復興史』)。

明治四十一年に全村統一組織として結成された田鶴野村青年会は、順調な発展を続け、大正三年には会則を改正して各支部会との有機的連絡を円滑化し、翌四年には会報第一号を発行、五年にはその先駆的活動に対して郡教育会長より賞状を受けている。十一年九月には田鶴野青年団と改称した。

三江村・中筋村・奈佐村では大正中期には全村統一青年会が設立され、校区が二つに分かれていた五莊村・神美村などでは、やや遅れて大正九年ないし十年に統一青年会が成立し、十一年前後に青年会を青年団と改称している。三江青年団では十年四月に団報第一号を発行した。また、大正後期は全国的に修養団運動が盛んな時期で、青年団もその影響を受けて、「流汗鍛練・自己改造」などと唱えて「一夜講習」その他、宗教的色彩の濃い修養活動が流行し(『神美村誌』)、中には東京の修養団本部に赴いて自主研修に励むグループもあった(『中筋小学校百年誌』)。

しかし、昭和に入ってから戦争の足音が近づくころから、青年団は国防的色彩が強まり、やがて予備軍的存在と

なっていくのである。

処女会から女 女子青年団（処女会） 結成は男子青年団にくらべて著しく遅れたが、これは男子が壮丁教育

子青年団へ という国家目的と結びついていたのに対し、良妻賢母的修養団体たるにとどまったためである。明治末期ごろから女子に対する社会教育の必要性は注意事項として指摘されるようになったが、指導は極めて微温的であった。大正九年県が『処女会設置基準』を定めてから、相次いで結成されるようになった。大正九年二月には田鶴野村で田鶴野村処女会が設立されている。十一年七月に女子青年団と改称、昭和二年綱領制定、翌三年には団服（事務服）を制定した。

次に豊岡町では大正九年十月、豊岡町処女会として創立されたが、当初は婦人会と姉妹関係にあり、事業や行事も多くは共同で行なっていたが、十五年九月豊岡町女子青年団と改称した。

そのほか、五荘村では大正十一年、第一小学校下は四月・第二小学校下は七月に相次いで処女会が結成され、昭和四年に至って五荘村一本に統一された。その後、次第に男女青年団共同提携のもとに行事・事業を開催した（『五荘村史』）。

城崎郡内の女子青年団は大正十四年には二八団体となり、郡内全町村に設立された。同年九月には城崎郡処女会が結成された。

婦人会の成立 婦人会は、一つは旧村の集落内に地縁集団として自然発生的に成立したもののか、今一つは愛国とその事業 婦人会や仏教婦人会のように目的集団として人為的に結成されたものである。豊岡町では明治

三十八年四月、愛国婦人会豊岡分会が設立され、奈佐村では四十三年に淑徳婦人会が結成されている。地域婦

人会のなかには、ある種の目的による過程を経るものも多く、すなわち明治三十年以降、教育に対する関心や理解が進む中で教育的な目的で組織された婦人集団が母体となることもあった。

豊岡町では明治三十年、婦人会事業として幼稚園を創立している（『めぐみ幼稚園沿革誌』『兵庫県教育史』）。ところが、その婦人会はいつのほどか一時、消滅したらしく、豊岡町婦人会は大正七年十月に創設、とある（『豊岡復興史』）。

会員数は当初一七〇名であったものが、十一年度には一六〇〇名をこえる隆盛に達したが、十二年に組織を改正して町内十四区に支部を置き、会員の素質向上を計って整理した結果、会員数一〇〇〇名内外に減じた。

十四年の大震災で会勢は一時停頓の状態に陥ったが、次第に復調し、昭和三年には支部二二・会員数一一〇〇余名となった。その後、町勢の復興にともなって逐年発展し、六年の満州事変発生とともに銃後の援護活動が主な事業となったが、八年十月には国防婦人会に改組して一体化した活動を行なうことになった。

その他、中筋婦人会が大正八年ごろ成立したとあり（『中筋小学校百年誌』）、田鶴野村では大正十一年七月に九支部・二六六名の会員で田鶴野村主婦会が結成され、昭和八年十二月にこれと構成を同じくする国防婦人会も結成されている。

また五荘村では大正十一年三月、第一・第二の校下別に婦人会を設立し、昭和四年一月両者合併して五荘村婦人会が組織された。会員は五荘村各戸の主婦五三二名で、傘下の中陰婦人会では、昭和初期に田圃を借りたり買い入れて共同耕作をして活動資金の助けにし、五荘村婦人会から表彰されている。

昭和十七年七月五日、豊岡第一国民学校で各種婦人会を統一した大日本婦人会の結成式が挙行された。そこ

で従来の五荘村婦人会中陰支部は大日本婦人会五荘村支部中陰班となる。婦人会にも戦時体制の強化が迫られたのである。

次に戦前教化団体の中に挙げられている団体に戸主会がある。五荘村戸主会は大正九年十一月に、田鶴野村戸主会は大正十年一月に結成されているが、『五荘村史』『田鶴野郷土誌資料』、これは主として部落内の自治や生活改善を主としたもので、現在の社会教育団体とは質を異にするものである。戦後は戸主会の名称も消えて、その流れを受けつぐのはむしろ町内会といえよう。

第四節 戦時下の学校

戦争の拡大 昭和十二年五月に『国体の本義』（文部省編）が全国の学校に配布されて、皇道教育の体制固めと軍国教育が行なわれたが七月七日、日中戦争が起きた。

十三年四月には『国家総動員法』が公布されて戦時体制が進行し、六月には『集団的勤労作業運動実施ニ関スル文部次官通牒』が出された。小学校でも出動軍人留守宅の勤労奉仕（家事・農事）をしたり、戦没者の墓地清掃を行なったりするようになった。心身の鍛練が強調される中で、特に武道や相撲など伝統的な格技が奨励されて盛んになった。それに応じて全但・郡・部会単位に学童剣道大会・学童相撲大会が催された。各校に相撲道場が設けられたのが十三、四年ごろである。十四年五月には『小学校令施行規則』が改正されて、小学校五年生以上に武道を課すこととなった。同じ月に『青少年学徒ニ賜ハリタル勅語』が出ている。



写244 昭和16年竣工した県立豊岡中学校の奉安殿

十五年は紀元二六〇〇年記念の年で建国体操の流行・全校駆歩訓練・神社巡拝継走（豊岡小）、雪中行軍（八条小）、資源愛護運動（葉草採集。三宅小）、冬休み勤労奉仕などの奉祝行事・記念行事が行なわれ、それらがすべて戦争遂行に結びついた。

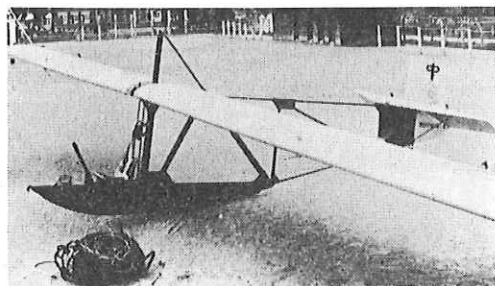
この時期の豊岡中学校は、日中戦争勃発直後から武運長久祈願の神社参拝が定例の学校行事となり、八月には夏休み中の全校生徒を召集し、大陸の出征兵士を偲んで出石神社まで耐熱行軍を実施している。

十三年六月、集团的勤労作業運動に関する次官通牒に応じて全校職員生徒が二五班に分かれ、二〇ヶ町村に出征将士遺家族の農事勤労作業に出動した。以後、勤労動員は次第に強化され、十六年には文部省訓令により総合的な「学校報国隊」が編成されて『学徒動員令』に応じ増産運動や防空活動その他に出動する体制が整えられた。

軍事訓練の面では、十三年円山川堤外地に夏休み作業によって滑空場を作り、グライダー部を新設して滑空訓練が行なわれるようになった他、管内宿泊・野営・校外演習などが強化され、十五年から妙楽寺射撃場で実弾演習・耐熱行軍（毎年）の他、十五年には妙見山（五年生）・神鍋山（四年生）・大岡山（三年生）などへの夜間行軍、十六年には全校生四〇キートル夜間行軍を実施、次年度には一〇〇キートル強歩訓練となった。豊岡高等女学校でも十二年夏から急に軍国的行事が目立ってくる。包帯三〇五巻の製作・出征兵士家族や戦死者遺家族慰安音楽会・集団勤労奉仕・報国隊の結成・実弾射撃などである。



写245 勤勞報國隊腕章



写246 創部当時のグライダー（県立豊岡中学校）

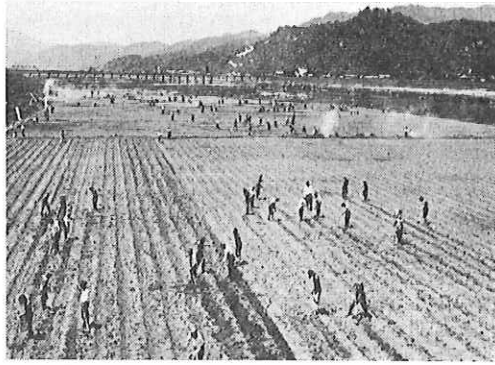
国民学校と
国民学校の胎動は昭和十二年の「教育審議会」の設置に始まる。政府はその答申の『国民学校に
決戦体制
関する要綱』にもとづいて学制改革に着手、十六年三月に『小学校令』を改正して『国民学校

令』を公布し、四月一日から施行した。学制公布以来の「小学校」の名が消えて「国民学校」と改められ、豊岡町の場合は豊岡尋常高等小学校が豊岡第一国民学校・八条尋常小学校が豊岡第二国民学校と改称された。

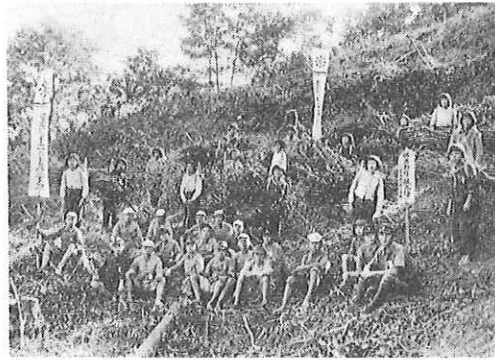
国民学校教育の目的は、一口にいえば「皇国民の錬成」ということで、教科内容は根本的に改革されて皇国民としての基礎的錬成資質を五つに大別して教科を編成し、国民科・理科・体育・音楽科及び実業科とし、目的と性質に応じて小区分して科目とした。

教科書も全面的に改定されて、国民科を中心に軍国主義的・超国家主義的な内容のものとなり、国家的儀式や時局的な行事の教育的意義が重視されて、学校そのものが、戦争遂行のための皇国民錬成道場となるように指導された。

十七年一月に『国民勤勞報國令』にもとづいて『学徒動員令』が下り、十七年後半から国民学校で高学年生は薪運搬・低学年児はどんぐり拾い（粉食原料）などを実施したが、学徒勤勞動員が本格化するのは十八年七月末の「県下青



写247 円山川堤外地の開墾（豊岡農校生。昭和16年）



写248 薪作り奉仕の豊岡第二国民学校高等科児童（昭和19年9月）

〇〇俵の製炭が割当てられた。

三宅国民学校では九月下旬、炭窯の築造にとりかかると同時に立石地区の山林で村民数名の指導のもとに、高等科は製炭原木の伐り倒し作業を実施、十一月二日には最初の炭出し（黒炭一〇八俵）をしたが、以後はこの窯から一〇数回にわたって計千数百俵の炭を製産した。ところが、十一月二十五日の製炭材伐採中、高等科二年生の男子生徒が死亡した。

豊岡第一国民学校でも、十九年十月には旧田鶴野村山本の山林で薪炭用材の伐採作業を始め、翌二十年一月

少年学徒の草刈動員」の指令以降である。
食糧増産については、十六年に可能な限り学校直営農場を設けるように指示が出ていたので、堤外地（河川敷）の開墾に加え、十九年四月には運動場を開墾して耕地化した。十九年四月、県指令によって薪炭製産の大々的勤労働員が行なわれ、国民学校一校一〇

から旧三江村法花寺山で製炭作業を開始している。

青年学校の 十四年度から青年学校義務制が逐年的に実施されたが、それが本科に及ぶ十六年度からは各地
統合充実 や各企業に続々と増設された。同年十二月に太平洋戦争が始まると青年学校の重要性はますます

増大、学校の増加に伴ない教員不足の状況が生じ、学校運営が困難になった。そのため学校を統合して、よりよい条件のもとに充実した教育を行なおうとする機運が盛り上がり、軍部から十八年度の要
望事項として専任校長の配置・独立青年学校の強化・教練の強化などが県当局へ通達された。

そうした状況下で統廃合が行なわれて、十八年四月から新青年学校が発足した。当市域関係は次の三校である。

①豊岡町他四ヶ村青年学校組合立豊岡青年学校―構成町村は豊岡町・五莊村・新田村・中筋村・奈佐村で、中心校は豊岡第一国民学校校舎内に置き、各村の学校を分教室とした。

②城崎町他二ヶ村青年学校組合立城崎青年学校―構成町村は城崎町・内川村・港村で、城崎部（中心校）・港西部・港東部の三教室を置いた。

四月十二日、中心校で開校式挙行、二十日には城崎部入学式、二十一日は港西部入学式、二十三日は港東部入学式を行なった。課業は男女とも通年昼間制で、男子部は毎週一回六時間程度、年間約五〇日間の授業を実施した。

③出石町他三ヶ村青年学校組合立西部青年学校―構成町村は出石町・室壇村・小坂村・神美村で、出石町弘道国民学校の一部を中心校として、各村の学校を分教室とした。四月十九日、出石高等女学校で開校式を挙行

表157 昭和18年度城崎青年学校生徒数

(男子部)

科	普通科	本 科	研究科	計
生徒数	2	185	36	223
不就学	0	2	2	4
就学率	100%	99%	95%	98%

(女子部)

科	普通科	本 科	研究科	計
生徒数	1	102	5	108
不就学	0	20	8	28
就学率	100%	84%	39%	79%

した。教授及び訓練の日程は(表159)の通りで、開設期間は男子部は一日六時間で一〇ヶ月・女子部は冬期四ヶ月間、地元の教室で毎日開設した。

豊岡商業学 戦局の進展にともない軍需生産を確保するため、政府は校の転換 「戦力増強企業整備」の名目で商業的企業の整理を断行した。教育の分野でも非常措置がとられ、十八年十月『教育ニ関スル戦時非常措置ニ関スル件』の文部次官通牒が発せられ、その中の『男子商業学校転換ニ関スル事項』によって町立豊岡商業学校は県立移管の上、四年制の工業学校に転換することとなった。

予め知らされていた情勢によると、県立移管後に男子部は工業学校(土木・建築)に転換、女子部は農業学校に合併か廃校という方針であった。豊岡商業学校当局とその同窓会は、女子商業部の存続を強く主張した。豊岡商業学校女子部併置の申し入れを受けた豊岡農業学校は結論が出せないまま年を越し、結局は十九年度から男子部は県に移管されて兵庫県立豊岡商業学校となるが新入生の募集は停止し、同時に兵庫県立豊岡工業学校(土木科・建築科)を開校、女子部は兵庫県豊岡女子商業学校(町立・四年制)として同一校地内に併設することとなった。

臨戦体制下の
の中等学校

生徒勤労働員が飛躍的に強化されたのは十九年四月以降で、豊岡中学校は勤労報国隊による勤員が主体となって授業は雨天の日のみ実施、日曜日も返上の日が多くなった。六月二十一日、

表158 昭和18年度西部青年学校生徒数

	普一	普二	本一	本二	本三	本四	本五	研究	計
男子部	0	2	58	55	82	50	71	23	341
女子部	0	0	31	27	15	—	—	7	80
計	0	2	89	82	97	50	71	30	421

従来食糧増産や土地改良作業への出勤にとどまっていたのが、『決戦非常措置要綱』に基く学徒動員実施要項』により工場への出勤命令が発せられた。五年生は生野鉱山へ・四年生は明石の川西機械大久保工場へ出勤、川西では八月下旬に集団中毒が発生して、生徒七一名が罹病した。

十一月には三年生にも動員命令が出て、三菱生野鉱業所と伊丹の花川鉄工所に出動した。学校に残った一、二年生も連日食糧増産や薪炭作業に出動し、冬季になってようやく授業が行なわれるようになった。

二十年四月以降、最上級生となった新四年生は生野・大久保・伊丹の前記工場に分散出勤し、三年生以下は開墾・農事・薪炭などの作業に連日出動した。五月十四日、城崎町栗々浦の今津渡し（現在の城崎大橋のある場所）で薪炭作業から帰る途中の豊岡中学校生徒の乗った渡し舟が転覆し、生徒六名が死亡した。

表159 同校の教授及び訓練日程

月曜	普通科と本科一、二年
火曜	本科三、四年
水曜	本科五年と研究科
木曜	町村巡回指導
金曜	三宅分教室
土曜	補充訓練
日曜	合同訓練(月一回)

また空襲の激化につれて軍需工場分散疎開の必要が生じ、『決戦非常措置要綱』に基く学校工場化実施要項』(十九年四月)が決定されて、兵庫県では同年十二月『学校校舎転用ニ関スル通牒』を発しているが、二十年には当地域の各学校にも工場が疎開し、豊岡中学校では第一体育館をこれに当てて玄武工場と命名、七月下旬に三年生が入所、八月上

旬には伊丹と大久保の工場から帰った四年生も入所した。

豊岡商業学校でも、生徒は十九年四月末から八鹿郡是製糸工場・明延鉦山神子畑選鉦所・日本毛織高砂工場に入所した。郡では海軍機「紫電」生産の一端を担った。

豊岡農業学校は、十九年度の一年間は食糧増産のため運動場を耕して甘藷の栽培を行ない、また職員生徒とも各地の農作業勤労奉仕に出動、二十年には戸牧・栃江その他の山林に炭窯を築き木炭の生産にいそしんだ。学校の講堂や倉庫はほとんど軍の倉庫に変わり、農場や校庭は城崎に設置された陸海軍病院の軍需食糧品の生産場と化し、試験栽培などの計画は全く不可能となったが、工場動員や工場疎開はなかった。

十八年度には陸海軍諸学校（陸軍予科士官学校・同經理学校・海軍兵学校・同機関学校・同經理学校・陸軍幼年学校など）や予科練習生の志願者勧誘や割当てが急増し、男子生徒の多くが半ば強制的に送りこまれ、豊岡商業学校では高砂工場に行った八〇数人のうち、工場で終戦を迎えたのはわずか七人に過ぎなかった。

豊岡中学校の十八年度海軍甲種飛行予科練習生の志願状況は、血書を以て志願する者・父兄の反対を押し切って志願する者もあり、締切日には志願者一三三名（五年生一七名・四年生九九名・三年生一七名）に達し、四年生は学年編成に困難を感じるほどであった。結局、この年の採用は九〇名であったが、翌十九年も志願者は一三七名に達した。

豊岡高等女学校は十九年七月に四年生が明石の川崎航空機工場に学徒動員で出動、二十年三月の卒業式後も卒業生一六九名は引き続き川崎航空に出動した。同年五月、専攻科残留生十八名は縫製工場に出動、四年生二五七名は八鹿町神武若草製作所へ動員、また、但馬衣料会社の軍服縫工依頼に応じて残留生徒が作業を実施し

た。二十年六月には三年生一二三名が八鹿若草製作所に出動したが、七月には若草工場臨時動員期間満了のため一たん帰校して学校作業に従事した。

学童疎開

昭和十九年六月、南方の基地サイパン島に米軍が上陸して以来、B29爆撃機による本土空襲への受入れ 日を追って激化した。政府は特に国民学校初等科の疎開を強力に促進することを決定し、七月には文部省通牒をもって全国十三都市（神戸市・尼崎市を含む）を学童疎開都市に指定した。兵庫県では直ちに『学童疎開要綱』及び『学童集団疎開実施要領』を通達して実施にとりかかった。

原則的に望ましいものとして勸奨された縁故疎開により当地域に転入してきた児童生徒は十九年に入ってから次第に増え、学童だけでなく中等学校生徒、また罹災による疎開も増加した。

豊岡中学校では十九年四月、疎開による転入生徒の受入れが次第に増加して在籍者一一七七名に及び、二十年五月には一四三一名になった。

豊岡高等女学校では二十年七月、疎開及び罹災による転入生収容のため一学級ずつ増加して二一学級になった。

国民学校でも同様で（表160）、中筋村でも縁故先のない人びとが「集団疎開」として各集落の集会所や寺などに疎開してきたし、親戚・知人で身を寄せる者もあり、学校への転入生が相次いだ。

『学童疎開実施要領』（十九年七月）によって神戸市では八月二十一日、三年生以上の第一陣が疎開地に出発した。当地にはその第一陣のうち、神戸市御蔵国民学校と浜山国民学校の疎開児童が八月二十一日に豊岡駅に到着、ついで八月二十六日神戸市神楽国民学校児童が城崎駅に、また浜山国民学校（第二陣）児童が豊岡駅に

表160 戦争末期の生徒数推移(国民学校)

年次	豊岡第一 (現豊岡小)	豊岡第二 (現八条小)	中筋 (含・高等科)
16年	1,882 ^人	209 ^人	372 ^人
17	1,940	—	400
18	2,022	207	399
19	2,045	252	438
20	2,202	257	422
(21)	2,046	242	397

の勝妙寺に移った。

二十年八月八日には兵庫師範学校女子部(旧明石女子師範学校)の生徒八〇名が、神美村三宅小学校に疎開した。

当時、御蔵国民学校(神戸市)疎開児童の附添教員であった松井正男訓導(西宮市在住)は長文の回想記を豊岡市に寄せているが、これによると授業は二学級編成で午前中だけ、午後は自習と遊び、その午後を教師は自転車で食糧の買出しに廻ったこと、子供たちが腹をすかせて近所の畑から胡瓜や大根をとってかじり農家に

着いた。城崎駅には疎開先の港西国民学校児童が出迎えた。

御蔵国民学校(林田区御蔵町。現在は長田区)約二〇〇名は、五荘村中陰の信楽寺・福田の新宮寺・田鶴野山本の乗雲寺・野上の帯雲寺を宿舎に、五荘第一国民学校・田鶴野国民学校を教室とした。

浜山国民学校(兵庫区浜中町)約一二〇名は、豊岡中学校(柔道場)及び豊岡高等女学校(作法室・補習科室・歴史室)を宿舎・教室にあてた。

神楽国民学校(林田区神楽町。現在は長田区)約二〇〇名は、港村日和山の金波楼別館・津居山の照満寺・小島の福田旅館を宿舎・教室とし、一部は竹野町の青年会館と興長寺に疎開した。

その後、二十年四月以降は一、二年生児童も疎開に加わるようになった。七月下旬、豊岡中学校に収容中の浜山国民学校児童の一部は八条地区九日市上町

謝罪に廻ったこと、ホームシックで夜泣きする子が多く教師や寮母は毎夜のように添寝したこと、シラミに悩まされたこと、などの苦勞が述べられている。

第五節 文学と美術

島崎英彦と歌誌『さつや』

氣比・絹卷神社の境内に「水汲むとくりやに来り人間のごとく愛しきかにの眼にあふ」という短歌を記した碑が建っている。郷土の歌人で、天稟の歌才を惜しまれながら若くして逝った島

崎英彦（一九一〇—一九四八）の遺詠碑で、昭和三十年没後に建立された。

英彦は氣比に生まれ、小学生のころから歌を作り、豊岡商工実修学校在学中は盛んに詩や俳句を作った。卒業して昭和三年、港府銀行に勤めてからは新聞や雑誌に詩や句を投じるとともに短歌も作りはじめた。昭和五年十九歳で歌誌『土筆』と『つきくさ』の同人に推されていた。翌六年には現役兵として入隊したが、その入營記念として処女歌集『神水岬』を出版、満州事変で戦傷を受けたが快復除隊、帰郷後九年一月に但丹歌人会が結成されると機関誌『獵矢』の中心歌人として作品や歌論を発表した。十年、北原白秋の歌風を慕って歌誌『多磨』創刊と同時に入会、「一部会員」（上位会員。他に一部・三部会員がある）にあげられた。十二年八月、日中戦争に応召し、十四年病を得て帰還、岡山療養所では療養の傍ら短歌会を作った。十八年に郷里に帰ると山陰地方の『多磨』会員によびかけて三丹支部を結成、病をおして謄写刷りの支部報（後に『白虹』と改題）を発行した。戦後、二十一年には英彦を中心に但丹の同志と『北雲』を創刊、作歌活動を続けたが病状は次第

に悪化し、二十三年六月に三十七歳で病没した。没後、二十八年に但丹歌人会により遺歌集『蟹の眼』が刊行された。

芦原をよぎりて来ればふかぶかと藍色あざろたたへし入江展ひらごる
(楽々浦行)

岩の間にせまりふくるる昼の潮浪にはたたで地を這へりけり
(日和山)

嫁ぎきていまだ解かざる荷の前に坐りて妻は何思ふらむ
(新妻)

歌誌『さつや』に拠った但丹歌人会は師系や流派を超えて但馬の同好者が集結したもので、二、三の同人の作歌を次に挙げる(『豊岡復興史』)。

小春日は心こころやすしけれいささかの光に散れる山茶花さざんかの花
西垣 政明

故郷より出で来し母を寮に置き子供の葬りにわれは来にける
吉田 枯蓼

今はただ癒えなむと思ふ枕辺に音たてのぼる鉄瓶の湯気
長谷川雅男

俳句同好会 前述したように明治後期、中央俳壇にまで名をひびかせた俳誌『木兎』を支えた結社春雨会は「蓼川会」

『木兎』廃刊後退勢に向かい、大正十三年に弥生会と改称したが、北但震災の年(十四年)に中絶した。昭和二年、町内の俳句同好者が相寄って蓼川会を結成し、機関誌『蓼川』を発行した。会員約三〇名、大倉芹舎宅に事務所を置いた。『木兎』の残党でホトトギス系の者もあれば当時、但馬に勢いを張ってきた倦鳥派(松瀬青々門)の人たちもあった。戦後、倦鳥系の『但馬こぶし句会』や京極杞陽の再刊『木兎』に拠った者もある。

手毬唄その一節をくり返し

鳥井 華南

雪の鳥人を恐れずなりにけり

柴田 麦舎

蛩とぶ柿の葉露の落つる關

白髭 夢堂

多羅葉にしづる雪のあらあらし

吉本 南甫

稻雀稻のかぎりに入日かな

大倉 芹舎

狭霧中月の稲架に人のゐる

山本 竈馬

雨にぬれ花の吉野を下りけり

作花 柳汀

啄木鳥の音す端山は秋の山

達富 蓼軒

稲の秋里に豆腐のなかりけり

谷山 春霞

星涼し風に流れて野を横に

佐伯 盃漣

彩人会と

昭和五年、豊岡在住の二〇歳前後の美術仲間（河原英雄・柗田たけを・立野貞雄ら）が、文学

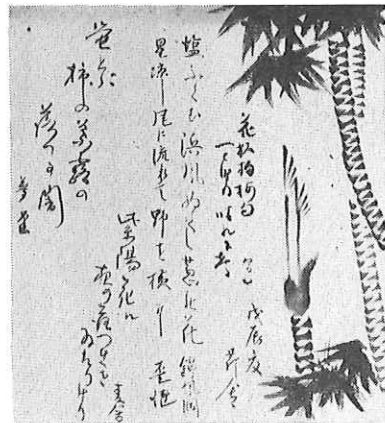
青踏社

青年作花勉の呼びかけでバイオリニスト福伊栄の宅を借りて美術懇談会を開いたのが美術グル

ープ誕生のさきがけであった。間もなく豊岡高女図画教師の島雄健や但馬新聞の児玉忠司ら加わり、彩人会の名のもとに宵田のはんだや呉服店で作品展を開いた。これが豊岡に於ける洋画展の嚆矢で、ひき続き翌年も

第二回展を開催した。

六年、西垣武雄（愚亭）が東京から帰郷して中央画壇の状況などを紹介したが、ここで新しく青踏社が発足し同人として西垣武雄・柗田たけを・河原英雄・児玉忠司・立野貞男・三上恒彦らが、はんだや呉服店の階上で第一回青踏社展を開催した。このころ生田通りの茶房ロロの店主上田村雄が芸術に理解をもってグループを



写249 夢堂・麦舎・盃漣・錦風洞・芹舎らの寄せ書き（白髭富恵氏提供）

歓迎したので、ここを溜まり場として文学や芸術を語り合い小品展を開いたりした。後に直木賞作家となった藤井重夫が、自作詩の朗読を聞かせたりするなどもした。翌七年には第二回展を中町のたちのや呉服店で催したが、豊岡中学生の本井一郎と赤木蘇夫二らも参加した。以後、年々開催し、十二年の第七回展にはメンバーの二九人が四二点を出品した。

翌十三年には国家総動員法が施行されて生活物資が配給制となり、衣料品の店頭販売ができなくなって空いた呉服店のウインドに、絵や書の作品を飾り街頭美術展を催した。十一年には李田たけをの『鉄屑のある風景』が独立美術展に初入選し、次いで十五年には米田弘と河原英雄が同展に入選した。戦局急を告げた十九年、河原英雄はたちのや呉服店階上で第一回個展を開いたが、プログラムに紹介文を書いてもらった独立美術会員の須田国太郎（久美浜町に疎開療養中。後に文化勲章受章）が来豊、李田宅に仲間が集まって作品を持ちより指導を受けた。

やがて終戦となって美術活動を再開し、戦地から帰還して出石に身を寄せていた独立美術会員中間冊夫（武蔵野美大教授）とともに、はんだや階上で戦後最初の展覧会を開いた。次いで、きしだや呉服店で開いた展覧会には、郷里出石に疎開中の伊藤清永（現在日展理事・芸術院会員）が協賛出品した。

第六節 ブラジル移民

不況と農 わが国のブラジル集団移民が始まるのは明治四十一年（一九〇八）で、この年全国で七九九名
村 対策 がブラジルに渡った。兵庫県人が始めて移民したのは四十三年で人数は七二二名、但馬人は一

人もいなかった。

大正八年、第一次世界大戦の講和会議でわが国は中国山東省の旧ドイツ権益を獲得するとともに赤道以北の南洋群島を領有、戦禍に苦しんだヨーロッパ諸国とは対照的に戦争景気に湧いた。豊岡特産のバスケット類も、中欧地域のバスケット類の対米輸出が途絶した間隙を縫ってアメリカ大陸に輸出され、対米輸出額は従来皆無であったのが六〇万円に達したという。

十二年（一九二三）になると外国貿易は衰退して、関東大地震や北但大震災が不景気に追いうちをかけた。当時の農村の窮状に関して農学士山崎芳蔵は「我が農業者の社会的地位、その生活は一言にして尽せば悲惨なりと言ふ外に適切な言葉を見出し得ない位の状態である。（中略）此等多数の農民を種々の圧迫より脱却せしめ、困憊の中より救ひ、悲惨な状態より取り出して、余裕ある、そして人間味の充溢せる所謂生き甲斐ある生を楽しましむる為には、其の一部を南米ブラジルに移住せしむる外に名案はないと信ずる」と述べている（『ブラジル』）。

この不況と農村貧窮化に対応するため、政府は十三年にブラジル移民を奨励し、渡航費の国庫負担という積

極策を打ち出した。郷里から乗船地までの汽車賃や手荷物運搬は半額割引き・ブラジルまでの船賃二〇〇円は全額補助・乗船地滞在中の宿料の三日分は補助・航海中の小遣十五円支給などの優遇策によって大正十五年からブラジル移民は急激に増加の一途を辿った。

但馬の移民

この内外の社会情勢のなかで、十五年（昭和元年）一九二六）五月八日、豊岡尋常小学校長・谷垣勝蔵は校長職を投げうって、一家八人をふくめて五家族三五人を引連れ、神戸港から大阪商船の新造船ラプラタ丸でブラジルへと旅立った。

その船出の状況は「五彩のテープを美しく翻し、海に浮んだ満艦飾のランチも、埠頭に波うつ数千の小旗も、みなこの盛んな門出を祝福するようだ。ひっきりなしに起る楽隊の音、渦を巻く万歳の声、移民を送る歌のひびきは天地を揺るがさんばかりである」と報道されている（『神戸新聞』）。

谷垣は移民の先駆者日下勝蔵（山東町矢名瀬出身）のブラジル事情講演を聞き、また大正三年にブラジルに渡り平野植民地で成功していた山下永一（八鹿町小佐中村出身）の熱心な勧誘に動かされたものであるが、但大震災が引き金になった事実も見逃せない。その意味で、この移民は「北但震災移民」ともいわれているが、谷垣は「ブラジルに新天地を求めて但馬村を建設しよう」と被災者を説いたが、当時の小学校長という社会的地位に加えてその人格と識見が、多数の共鳴者を得た。若手のリーダーだった羽賀喜之助（百合地）もその一人で、妻と二女と妹二人をつれて谷垣らより二便前の船で先達として出発した。その後、コーヒীর栽培に成功したが、知人への手紙のなかで「地震後の不景気のためブラジルで牛飼いでもしようかと移民しました」と書いている。谷垣と行をとにした五家族は、藤原滋雄一家（内川村村長）・谷垣忠左衛門一家（内川村）・田

中猪之助一家（内川村）・太田秀二一家（田鶴野村）・太田きよ子（五荘村高屋）らで、谷垣の熱意に動かされてブラジルに「新来日村」の建設を夢見て、出発に先立ち再び帰らぬ覚悟で家・屋敷・家財道具すべてを処分しての悲壮な旅立ちであった。内川村民は藤原村長らの移民を城崎駅までの四ツ木の道を歩いて見送り、谷垣は豊岡小学校講堂での壮行会の後に全校生徒が豊岡駅までの沿道に整列するなかを出発した。

この後、谷垣の「但馬村建設」構想に賛同して多くの但馬人が移民したが、その総数は六〇家族・三五〇人ともいわれているが不詳である。

十五年五月の谷垣らの出発以来、六月・七月・八月・十月・十一月にそれぞれ二船、九月には一船と神戸港から移民船が出帆したが、そのほとんどの船に但馬の移民が乗船した。六月十日のさんとす丸には富森米吉一家八人・滝本鹿太郎一家七人・富田英実一家七人（以上、五荘村字伊賀谷）・羽尻喜久治一家四人（資母村）、六月三十日の河内丸には北山賢一家七人（日高町日置）・寺田森蔵一家七人（国府村土居）・尾崎万二一家六人（同）、七月十七日のまにら丸には谷岡信太郎一家五人（竹野村坊岡）・小河峰太郎一家七人（宿南村浅倉）・仲田巖一家四人（合橋村唐川）がそれぞれ乗船していた。

移民の生活

ブラジルに渡ってからの移民の生活は、ほとんどが一農年契約のコロノ（農業労働者）で、各地のコーヒー耕地へ分散し、厳しい労働に追いまくられた。その上、ブラジルの邦字紙日伯新聞社が「日本村とか兵庫村建設とかいうのは困る。日本にアメリカ村などつくられたらいやなもので、反発を招くだろう。それと同じだ」と論陣を張るなどのこともあり、さらには現地移民の間でも、一時的な出稼ぎ根生やロマンチックな夢を「目下人口問題や労働問題に行き詰れる日本に比べて、ブラジルがいかに容易で有望

かは、われらに伯同胞の全部の言う所である。ただし、このブラジルは出稼地にあらず。すなわち移住するからにはブラジルへ婿養子として永住し、子々孫々の永住的墳墓ふんぼの地として、我等がその基もとを築く覚悟がなくてはならない」と批判した。『ブラジル日本移民人国記』には、藤原村長の長男一郎の「但馬村建設を夢みながら、父滋雄は他界した」との談話がある。

しかし、多くの但馬移民は平野植民地の開拓を手始めに、コロノの身分から立ち上がって自力独歩の道を着実に歩み始めたが、第二次大戦が始まると連合国側に参加したブラジル政府は、日系人の財産没収・邦字新聞の発禁などの措置をとり、日

本移民は大打撃を受けた。戦後、移民者間に日本の無条件降伏を信じないカチ組（信念派）と、信じるマケ組（認識派）とがはげしく対立して大混乱が生じ、不逞分子には国外に追放されたものもあったが、

ここはブラジル北端の

五千里あまりのアマゾン江

渡れば広漠 パラー州 （おりのつごう）
（鴨緑江節替歌）

ハアあ 来いというたとて

帰らりよかあ 故郷こくにへよ



写250 昭和初期のブラジルのコーヒー園と日本人住宅
（在ブラジル・滝本鹿太郎氏提供）
（豊岡南高校蔵）

故郷は幾千里波の果てえ (佐渡おけさ替歌)

などの歌に見られる郷愁や苦難を乗り越えて、大正の但馬移民はブラジルの大地に定着したものが多く。

豊岡市か 昭和三十三年、日本移民渡伯五十周年記念会発行の『ブラジル日本移民人国記』によると、豊岡市の移民 岡市関係の移民の消息は、次のとおりである。

常田光信 (大正十年渡伯。上鉢山。ソロカバナ線サントアナスタシオ駅・バイベン植民地。独立農)・石岡幾造 (大正十年渡伯。庄境。サンパウロ州ペレイレ・パレット。綿作・コーヒー栽培)・鞍留潔 (大正十二年渡伯。新堂。ノロエステ線カフェランジア駅。モーロレドンドコーヒー園経営)・森垣与一 (大正十二年渡伯。中央町。バストス移住地エスペランサ地区。コーヒー園経営・養蚕業)・谷垣勝蔵 (大正十五年渡伯。本町。ノロエステ線。リンス学園経営・カンポ・ベルデで農地二五畝)・谷垣忠左衛門 (大正十五年渡伯。内川村。サンパウロ市近郊。カンポリンポ花卉園経営)・田端孫之助 (大正十五年渡伯。瀬戸。北バラナー。コーヒー園経営)・羽賀喜之助 (大正十五年渡伯。百合地。ノロエステ線カフェランジア駅。平野植民地指導者)・富田英美 (大正十五年渡伯。伊賀谷。カフェランジア駅周辺。コーヒー園と養鶏場経営)・タンガラ中央区日本人会長・カフェランジア産業組合理事)・川瀬久治郎 (豊岡町。ノロエステ線リンス駅フロレスタ植民地。コーヒー樹栽培請負農)・川瀬謙三 (豊岡町。ドラセーナ郡ノーバパルメイラ。日本人会会長)・生駒真澄 (豊岡町。浄土真宗布教使)・西本願寺開教教務所執事長)・沖野確三 (昭和二年渡伯。城南町。カフェランジア駅平野植民地。コーヒー園経営)・信部亀夫 (昭和十年渡伯。佐野。平野植民地。マット・グロッソ州ドラーードス分耕地経営) である。

以上は二七年前の調査資料に過ぎず、ブラジル移民の全容をつかむことは極めて困難である。

アルゼンチン 別にアルゼンチン移民として、田中数好（大正八年渡重。神美村香住。ミシオネス州ガルア
移 民、他 ペー移住地。柑橘園経営・花卉栽培の研究と植林指導・後続移住者の指導と援護に尽力）・谷
口万年（大正十四年渡重。豊岡町。ミシオネス州ガルア・移住地出張所主任・移住者の指導に尽力）、フイ
リップン移民としては沢田宣（大正四年渡比。三坂村。マニラ市。大和バザーを創業・一般雑貨の輸入卸小売
業）らの名が残っている。

さらに満州事変以来、農林省を中心に満蒙開拓計画が立案され、全国の農山村で満蒙開拓義勇団が編成され
満州に送られた。第十二次集団開拓団（昭和十九年）は兵庫県を中心として計画されたが、具体的には氷上・
三原・佐用・美方・出石各郡が中心となり、豊岡町民の参加した形跡はほとんどない。これらの開拓団は敗戦
直後の逃避行で悲劇を生み、なかでも出石郡高橋村（但東町）の開拓団の老幼男女四〇〇余人が松花江支流の
呼蘭河畔で渦巻く濁流に飛び込み自決して果てたという惨劇は広く知られている。

第七節 その後の豊岡病院

豊岡病院 公立豊岡病院組合加入各村の伝染病隔離舎の老朽化と、患者の増加にともなう豊岡病院の狭隘
の 移 転 化が進むにつれて、病院の規模を拡張し同時に各村の伝染病隔離舎を統一して病院に付属させ

ようという声が高まってきた。それは、従来の敷地からの移転を余儀なくさせるもので、町内では城南・駅
前・花園の三地区が誘致に乗り出したが、従来の町村間の対立がこの移転問題をきっかけに再燃した。

議員数で優位な村部は、組合規約改正の形で隔離舎問題と移転問題を強行的に解決しようとしたらしい。昭和七年三月三十日付の県諮問に対し、豊岡町議会は①豊岡病院へ隔離病舎を統一する、②病院を新田村立野へ移転するの二案に反対、代わって豊岡町有の隔離舎を組合加入町村の共同使用とするための町村組合設置を逆提案することにした。

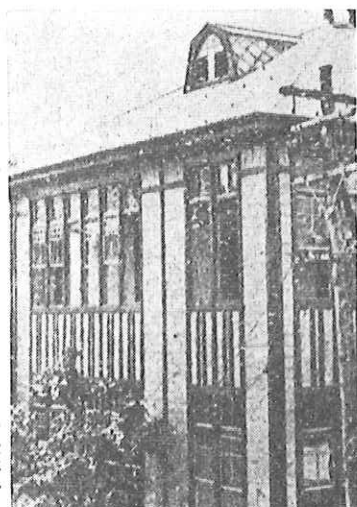
別に豊岡町は、病院組合議会の議長・副議長選挙条項の削除を求める組合提案も拒否した。この提案は、議員数では少数派の豊岡町が中心町として議長に就任する慣行を阻止し、同時にいわゆる名望家本位の選出基準が崩れると、その下に立つことをいさぎよしとせず特に副議長の選出が難行するという従来の障害をも、一挙に除去しようという意

図があった。

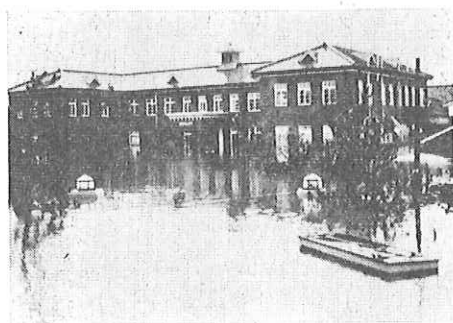
しかし、この提案にも議事運営の代案が不明確で、病院創設以来の町部対村部の確執だけが浮き上がってくるのである。

豊岡町側としては、

①案は既設の隔離病舎



写251 大正11年の公立豊岡病院(本町)



写252 台風で浸水した立野の豊岡病院(昭和9年)

を持つ町としては不要不急の問題であり、②案に至っては、創立以来の敷地・管理者とも豊岡町側で占めてきた歴史的背景や、豊岡町が地域の中心都市であるという立地条件を完全に無視したものであった。

町も町会も強硬に反対、町民も町の主張に賛同し、四月十五日の町会は県諮問に対する反対の答申を満場一致で決議した。

一、病院ヲ立野ニ移転スルノ件ハ否トス。其理由、公立豊岡病院ハ同組合設立ト共ニ本町ニ設立セラレ、爾来数十年ヲ経テ今日ニ到レルモノナリ。故ニ此歴史的事実ト組合規約ノ保証ニヨリ享有セル本町既存ノ權利ヲ喪フコトハ本町ノ忍ビ能ハザル所ナリ。

一、「伝染病院又ハ隔離病舎ニ関スル事務」追加ヲ否トス。其理由、本町ハ広大ナル隔離病舎ヲ有セルニヨリ其必要ヲ認メズ。

県諮問は七年二月十日の病院組合会の確定事案とほとんど同一内容で、組合側が組合決議の認可を促進するため県に働きかけたことをうかがわせる。しかし、豊岡町の反対答申により組合側は決議認可を県に迫るなど、形勢は切迫した。豊岡町民も四月十七日、町民大会を豊岡小学校講堂で開催、立野移転反対の陳情書に署名して県に申達した。

県は問題の処理に関し五月五日の県参事会上に議、調停に乗り出すこととした。

このころの立野地区は円山川改修による新水路によって新田村からは隔絶し、旧水路の廃川化でむしろ豊岡町域化していた。兵庫県は新田村立野を豊岡町に併合する仲裁案を提示して、村部提案の実を挙げるとともに町側の名分を立てることに成功した。立野地区の豊岡町編入は昭和八年四月一日、病院の移転は五月一日であ

る。

ここで注目すべきは、当時の伊地智三郎右衛門の立場である。伊地智は旧三江村祥雲寺（三江村長を経験）から豊岡町に居を移し、豊岡町助役・町選出県会議員・豊岡町長を歴任、いわゆる大豊岡構想の実現者として円山川改修を始めとするさまざまな大プロジェクトを成功させてきた。町長在任中の昭和五年一月、突如として疑獄事件渦中の人となり、三月に町長を辞任、収監された。政友会に属する伊地智に対する民政党系の謀略だったといわれている（既述）。

無罪をかちとった伊地智は、公立豊岡病院組合管理者として、一見「村部に加担して豊岡町と全面対決」する姿勢をとったのである。昭和九年の「町長クジ引き」決定（既述）のときに、町会の伊地智派は半数を占めていたというから、病院移転問題をめぐる町会

表161 公立豊岡病院組合分賦金及び会議員定員数

地区	戸数	分賦金	同上%	議 員 数	同上%
豊岡町	2,843 ^ア	7,676 ^ア	51.2	11人	38.0
新田村	370	999	6.7	3	10.3
田鶴野村	410	1,107	7.4	3	10.3
三江村	373	1,007	6.7	2	6.9
五莊村	691	1,865	12.4	3	10.3
奈佐村	391	1,055	7.0	4	13.8
神美村	475	1,282	8.6	3	10.3
村部計	2,710	7,315	48.8	18	62.1
合計	5,553	14,991	100	29	100

注 1. 分賦金は昭和10年度、会議員定員数は昭和9年度
 2. 神美村には安良・田多地を含み、口小野以南は含まない。
 『豊岡復興史』による

表162 公立豊岡病院組合歳入出予算（昭和10年度）

歳 入		歳 出	
使用料・手数料	99,324 ^円	管 理 費	1,431
繰越金	1,916	会 議 費	235
雑収入	820	病 院 費	93,643
組合分賦金	14,991	伝 染 病 院 費	5,749
県補助金	3,624	組 合 債 償 還 費	15,717
		蓄 積 金	1,000
		雑 支 出	50
		予 備 費	400
		臨 時 部	2,450
合 計	120,675	合 計	120,675

『豊岡復興史』による

内の派閥的力関係の推移は不明瞭なところが多いが、結果から見れば伊地智の立場は広い視野と長期の展望に立ち、地域エゴから移転反対を叫んだ豊岡町の大勢と対立する形をとりつつも豊岡町にプラスしたといえよう。

県 営 移 管 問 題

豊岡病院の財政問題に関して、その解決策として県営移管が取沙汰されてきた。昭和十七年二月中には「移管条件の最終的決定を見、県営移管が実現するものと期待され」たことがあった

〔但馬人』一三三三号〕。

公立豊岡病院の県営移管問題は、県衛生課と病院組合当事者間で交渉が進められ、移管条件として組合側は敷地・建物・その他の賠償金六五万円の他、①現職員・傭人の継続雇傭、②組合内特定町村三ヶ所に医師を常置して県営診療所を本年中に設置、③組合町村患者の往診の無料化、④組合町村患者の優先入院の諸案件を提示した。

「賠償額に多少の困難が予想」されるだけであつたという交渉も、結果的には破談になった。